12
881
22

乙通女

巻乃名は事ハ　河宗　哥と詞とをもて名つけゝらし

をとめ子も神さびぬらし天つ袖ふるき世の友よはひへぬれは八

源氏卅二歳乃三月より卅四歳の十月まて乃ことを此巻に

見えたり雲井は鴈の年十四なり夕霧十二なり

細　巻の名は哥并詞等是五節乃ことあるゆゑに名つけて

とみえたり　河　巻名は又蓑葉姫為宗

年ころ過て宮の御もとにもと思まほし　河　薄雲閏月也

去年は三月より薨給ひし故三月は諒闇成へし

世中色あらたまりて衣の色の猶もとにもかへらぬを

河宗　除服とて服衣をぬきかふる也三月の末つかた天下皆諒闇

乃はてに毎年るる也中宮又式部卿の除服四月乃更衣より

あひはてゝ除ちるへし

ましまさりつの比を　栄　哀なるにちかうくましまし
まつりごとも
太平の至れるしるし也ちよりをさまるに　四月ハ清和の天と
て仏の死給ふ也孫閣乃後世中比人の心も引替面白
わりや　細　四月天気和して又清しとまうす
前斎院ハ清ましくしてやめ給　孫栄　葵の比斎院かくれ給ふ
るとおほしめしいろにいひしはまうくたる也
細
槿斎院也今年ハおりゐ給とそいふ
ゆきへるつかさ乃さて風ゐすつしきにつきてもなほあさ
人ハおもひつくとくもはうた　孫　桃園宮の姫君槿木
や賀茂祭のまつり用る本なれは槿宮乃給女達をも御末
とりて葵御禊なるとふ也し　細　斎院の御前也
大殿よりまみゆき日毎にのとかみおほせつりんと

孫栄　御禊の日也葵の三日前也それかくへと御服と
槿宮ハ一疋まし給と見えたり御服の禊ハ河原より
出給ふく左給御へしいふのとやうにと八斎院おはす給
ほとに去年はやうつとめてんきれにおほさくんとも
とふくひ嘆のしきを給へりなかそ　孫　祠
見るへしとうかれの日ハやおするを源の大乃祠也
うきをきやハ川瀬乃波をも立ちかへりてみるかの葵乃やりきをと
栄
源氏君也槿宮のやうに斎乃哀まやかまりて清く禊し
給つんなるとくハ河瀬の流乃きそてとひおもりし也
立かへりるとくを波乃縁よりて御服をとひゆるてまゐ
る也　細　思ひかきをはるるとも也去年とハ斎院御かくを
思ひきをてわりとりてしとも也君の御禊御服の日此禊のゆ
也御しけ斎院わりぬさきを給て御服乃そうかれ去給らん

也ハ思ハすとも夕顔と御名付させたり此物語にあまた
所ありて花のきさやハとひらきさやうと云題也
抄 源氏よりうちの所の花ハ惟光随身乃すり花ハ随身乃惟光
随身や又しう前院乃かりさきを給へく随身の類
ちゑうんやハとひらきさらしとも惟光をとらへる
ちるへし
此うさ花乃うつくしく 孟 此花乃紙にかくハ夕顔の花にはく
名残也又夕顔ちりしとひらきさへ云る也
又もくろみかく夜乃花はつゆを給へり 孟 又のさ夜あまり
もえたとも云ふ家出る也
折まの夜なれハ法るへしあるま 抄 大まハ源氏乃文なるを
とてへしきと給ふ其ハ夜なるともなれ大法也
所る也 細 所るめとも時節に感ある也

夕顔さしハ明白と思ふにやにハ惟光乃瀬によそへ給ふ心を
抄 孟 権官なるも夕顔のやつれたるも明白せさてれハたゞや一めうり
に成て随身し給ふやうに惟光と思ひ給ふく光陰のうつり
かはるをいへり頼るとなく惟光の瀬にかゝる也へ本寺に
古注 新る川瀬ともあへぬ我宿とせんかうゆく物あそふ葉う
細 随身乃惟光也月白れなやうとうるゆゑ引寺同
ちらんくしたるとあるを見んの法めとゝめ給へく見あらは
孟 光陰のことをいへり又云也秋院の寺社ちらしさたるを
詞よあそへハさし法又ありにられくとなるとしにめてたし
法事くるにかれ給ると思せんしれまた洛を記まして我に
しやまるとしくとあらくを 抄 随身のよしや源氏の法るうう
法すくとと宣ふる洛まのてたまはや見えたるをしきことに
也とも秋院のくへを云まを法まくなるともつりくを 八ッ右之半 聊取あり也

細 又宮は賭をぬきものへハ吉賭を調して源よりまさらんと思ふ也
院ハ見んとするにきこえしかハわかれの後へと 細 桃園也院とも
うちとけ給ふへしとも也
わかしやうにきこしめしたる御文なとのあらましをとかくも
覚ゆへきさめ 宗 好色の御名しきりに文なとかよはしてそ見え
ともやさしめ也宣旨なとかうつらふも也
年比もわれゆやかきさへ御のわたりて此御ことのひるかとハ覚ゆしみ
らうし給ひていとまめやかなれハいかて見えをもまのあたりに
ゐかしんやうゝつし給へし 孫宗 若くも聴公の時なと
ハ源よりも御位のほんさしハめつらしうもぬととも文なとを
ものきこうしてくへしよつりせんともそていつかへし
此一すち例乃式アりとしたるまたるん給へし 細 桃園よ
ましくし時もやれとハ常れすなれハと宣旨に申遊

女五宮の御方にもかやうのおりすくさす御とふらひ聞え給へハいと
哀に此君乃さの御まへにちとやとひしをかくおとなひくと
めくみ給ふうちのいともさしもさゝるゝにかくてさへ
そへては大宮とおもひいてそ給へるとほめきこえ給を
宗 源よりも槿への事くは御寄(コトヅケ)給とも也
わたくしへとハなくてひとへ也 細 桃園への御心さしみて時の移をも也
こゝのさみもそとめしてはふわたりにこれおもしろかけくいと様んこ
給よ 細 女五宮桃園に住給御親の時ハかく別し給也
宗 女五宮桃園の御方にかく源乃ゐるとの給ふ也
きこし給めると 宗 五宮乃源氏の聴(ミヽコロ)にきこゆると槿の給ふ也
あかつきそうしめたる御心さしみもあらまし 細 式アヽ宮の事
新も桃園宮みくましきやうにおもひきとハ心得給ハし也
二宮もおもちくとみくえかんすまぬあけさとし給ひてかへし

とひきちかくたてさせ給へるにまてたる道給へるなるを
の給へりくやしきことおほけなくおもひしおもひくらへ
抄 式部卿宮も無礼にさ給ふとをさらにとひにかうへりける
間のことをきられ給ふにめくりへり 細 無礼にある給て
源氏のことをまてされまた給ふまへや
すちことにみえく 細 源をとこ人にかたるのしめつとはいへく
ちかしきみこのみ給しや
ゑかたくてうつして 抄 源氏を解合にさうら給ひぬとの
歌をとし給ふも権太をと源氏にあらそひたちし
にまてちかき道たるかは葵上にあひ給ふのやうきとおもひ
くやしき給ふとも又まてさるかたはいはゝ権官の源氏に
はかむことを同し給ふなるといふことにいへり
されとこたえとの姫君物をくまつらするは六条の息所の給ひ給ハ

むことのいとほしさに 抄 葵上のこともおほしまうくとはいはる
命まてかくしかりの親も六条ハ葵上の母なりし女の
婿ありてまたおはし給ふや
くろみそへきこゆることもあらましなや 抄 源氏より
あひさ給へと権すともえか給ひぬハ三条の内にいとはし
さしとのおもひ又は葵上御命此中あるにおもてなる
あるへしとこそ人さこそおもや
いあはせのあんしとおもくえたしぬをちかくものせまつ
人さへみつかくつれなきにうちてはさやうにかくおもて
せまりしもあはれ深しうちおほし給ふもけしからて
かく残ることもまたきこえたまふもいふかひなしとおもひ
あるとのはたらきいたく給を 抄 本意の葵上のたちの也
それもきやうなりけりなへたと源氏にあひ給ふ

をはしくハあらしとやうやうにおもふ折ふしにてうらみ
給へるなれハ是世乃そしりもあらむかとおもふさまなる
めしうの給ふやうしくてとも是文字ら内ゆへなる也
宮女のん殿給なりて給ふく又源氏の給ひまつりし
給ふやも前のよを乃給勤目（スヂメ）成へし
むつきたりしと折ふしぬ　宗　父宮の給ふ也と申て槿乃ん也
故宮ふも志乃むこちに給ふと云ゆれなまりてまたれ給ふし
をとたゝしに又よみなかひきちんてん也といとつきなきに給ふ
まめんと申よ給てちつし常なから法名しきなれハ志あ
あをえ申のしおほむも是給ハは　宗　槿の返答也志やゝれこの給也
官人もうしとみるよ乃を申とられと　花　上下まに殿
乃給女源氏よ同んせる也
世中いとうしろめたくのみおほさるれと　花宗　槿斎院の
心ときめき給ふも我心なからおりて源氏をへたてらるゝもあやしかるへき
女の法さうしき　源氏法心也　細　源也
わゝんをはかしく義を見へし申て人の法ましきのうちをゆ
るゝむ給をとそまちわゝるを給へさやうにあるなちたるさ
あまは法んやうなまきてしんるをハ　宗　是よりまハ源氏の心より
也給へ斎成へし
おほさゝ給ふし　細　是より斎院の御ゆるさとこそ
大殿いゝゝのわゝえの　細　是よりまた女青れ御ゆる也
御元服乃ゆおほしいそくと二条院なくて御たちとも
細　夕霧十二歳也　河　元服の事桐壺ノ巻に注之
大宮のいとゆかしきをたにおほしあるも志とたちにかくらし
くれたるもとやうてくれとのなくせさもとなり給ふ　花　うちとなり
是はまた宮ふつくろうて給故よ彼殿にて一ハ三条

の役仕(チジ)のおとゞくれは不被入しきれみこ腹ともよむや
右大臣の腹ともよめる也して　宋　頭中将のことや葵上と一腹也
法ともの腹なる皆上なきれ頭んしとちすれ法おほしことに
てのこまのし給へも　孫宋　葵上頭中将のことめ給ては不腹の
兄弟生のことをや夕霧此為にそともちのことや
あるしろふもよ遊もくやたるへきよしともとるもくに
はゝうくつり給ひ給ふくさ世ゆきりたてところをそれはつそ
きれつきとひちすり　宋　源氏のはゝうるや継母にてまし
ますをもとにゝまちち給ひへし又誰(ツレ)うさゝハ大宮
のことを云り如何　孫　大宮のことなるへし
やうて四位になすちんやおほしよくもたそあへんとなる
と　孫宋　叙王の法子ハ元服乃後やかて従四位下に叙(ジョ)を源
氏乃元服ハその法にれ源氏乃同位に(ケイ)はかるを故ろ歟

主れ法子に准(ジュン)して四位に叙し給ハんと云けるをたれ
ともに擬爵(ギシャク)あるゆへや四位になすし給ハんとハ法への法
なり　細　一世の源氏ちてに叙せん〳〵すれとも夕霧
ハ世のおほしとも背人らてたゞめて四位に如給へき
と世間乃人もとをるや
まうひとをきひたる侍とをと我なにまうせたる世みく
宋　おさまるれとのへや源氏乃むすら給ふぬ色も権門(ケンモン)
のこゝろましめさぬさをくや
あゆく丁とあうれんを中くめかれ無うるあうとおもし
とめ川　宋　云ひやりなれとのへや中くめなれてめう
しらしぬとおほしとてまろや　細　不用意(コゝロナラザル)也
あさきみくち腹上よくへ給を　孫宋　あさきの袍(ハウ)ちなるに
四位あらハあきの袍とてはかる〳〵しきも紙擬爵も

緑くあさき乃袍とて云緑也あさきとうるをゆるしてみく深緑
とあさきのこといふ六位の緑乃袍をあさきといふ
ハ夕霧ハ六位になるへし殿上にまいる路とハ童殿上乃
人加冠(カムリ)してまた殿上するをいふや 細 六位の緑乃袍を
いふ殿上まいる路をとハ夕霧ハ童(ワラハ)殿上とて童形(テイ)
みなく昇(セウ)殿するを人まれハやかてゆるさるゝの路
をいふ
大宮ハいかにあさましきことゝおもほしぬるそことはりといふ事と
にいたしたる事ある 孫案 夕霧のうへハあさきの袍に路
みをとくちおしく云ひ路とや何たるへし
後にめんおりてこの事を御 細 大宮源に対面して路てや
たくいまおほくあるうちにしもまたこさるそいつくにもあるまし
侍れと思ふやう侍て 孫案 源氏の大宮に夕霧の官位乃

まことの路詞也
細 まことに夕霧の官をとやかくてたゝくのかりて人のうへおひは
ぬやしみをもさ路へしれともとふ事あるまてとの也
昇殿をまたひつきとらするもの也
たゝくれみちまさうしあるハ法んの道ハ得たるなるといふ二三
年をとつへれけるにさひるまてとのつくりわかやきみを
はゝかりつゝわかへきにとしれくれ 太かくの事 孫案 儒者
乃ちやまことのまいりし二三路二三とをあるかうしやさん
とやいふことのかしとハ官位と昇殿を路つけぬ間のう
との路へつりたる学文ときも路りんとや儒釈(ジユシャク)道(タウ)の三
ハ儒ハ孔子(コウシ)の称を仏法(フツホウ)道ハ老子也夕霧ハ儒のかたを学(マナフ)
や花西三条乃大臣良相(ヨシアフ)公ハ実優大臣の家を嗣(ツク)
其のまや大臣息(ソク)大学乃なをとるすし此もし例也く

しき河にみえしたり　細　二三年ばかりは延桐のころ見えた
学の道にへだつる良相後見もなく例を
今ひとたびあらん　孟　その時官位をもすゝみなんとや
みえしは世の色のうちにおもひ出侍りて世中ののぞみも
見給へき　孟　源氏や世中の有様とは実を思ひとも
さるべしとや　細　源の自称
よ源氏る浮ぶ前にひとつくみえしにや　孟　源氏の浮
前乃り八大臣浮前と読べし
あられさ文あるをもあひ給し　孟　源氏の卑下乃詞也
なかくうて此浮よりては人侍しるたにありけるをひろ
きんをもてぬ給を　弄孟　桐壺帝よりもむよ習給ふも桐
帝は延喜にはしられし延喜は広才にまし〳〵海まで給
よめば似たり　細　延喜乃帝よりもあひとなるもあるも也

うき世侍へ〳〵よまたりけるをおほしたる也
ゆんさいとまうせしを　弄　文章の事
たとへましたかしく人をも得させたまへよろしからのおほしくを
帝侍る　孟　とよひなる此も也
あられさたりやよう〳〵此子のきはたるさまにしはとうる此に
とにあらん給まへ　花　子のうちにとはかしこきもあられさとは
歎にはまさるのはある此あるひや見はまさるのをるも舜
主の文に聲瞍也といふ人ありきそれ田夫といひけれとも
舜歎にあまりおもふことあるにしもひとつまろうしてよ信推
ハいくはらも学文の浮世に時の帝に成給ふとなるも又見るも
於師一城師が徳をもち文子のをもみえこれわするしくもし
細　賢子のもとる文になるすかうこれ祖也流鬼子平
ましてつきくはさうるとけ〳〵ひとつかさゆるも思へとの中

されはとしつかさあるれはよきかんにうつる人とこそいへる
源氏のとれさ親なりけるにましてとらのれ多すとの
心也　私　せいしをいふ心也
さうらう家乃子としてはうきさうりしようにひせゆき
うるにたゝうるひぬきえうくまんなとにかはるし
めんすれはとうはくあんおほゆ也へかうさうかれあるひとこの
ミて　抄　壱人の家乃子也摂政関白也世すくれるをおもての縁也
心のまゝなる官爵よのかはりぬれと時によきてくらふ世人の志
ゐみかそりるまゝしろうきさとしてはいせうしそしたとりて
ちうろふ猶者をとのつゝく人とおほしきゐ人としちかはれやう
あれと　抄　ちてらみはられましろうきをとしても是ハ白鼻をも
うこうしめとうしるもしてみ人とも上みてはいせう
するも也人ハ云字にて官位なるなとのかる人をいふ也

時にあへる人はきんなるたちをもまきて世おもくなるすゝみ
すはん人は家めあるものはうるにとなおおもふにあらん
作りあそとかしをもまくしてこそ　抄　案　時世おとろへ親
なとにわたつあれは人のあるへかるうしかたるを
このさえ云字なれも便なけれとも
やまとことはのよしのちひかるすかるともはよう徐
らめ　抄　案　自らの目あてしつるこそ云心也　和国竈のやうなれ
ハ世おとろへ親なとにかてもへ人はまちひかるへ物の也　同之　細
作りあるうちておんもとなるのやうにおもふもはゐなのよれ
おりしゑなる人へさ心をさきてとありひなるそ　作りあそう
抄　当座とハ祖也官位なとにもしまりて心もと
ありやうなれとはみなて世乃おりしとありしんへも
ちよとあらしきさんの心也　細　当時さしあたりて

叙爵(ジヨシヤク)なとさへあるましきとなり
何ともなりかん姫もしろ中まうさるへきにはあらぬかん
細 源氏御所中の御後まてと也
只とはかくしうしはあらしてかくてくへて御しも
栄 源氏の深き身は卑下の詞也我かひくくしなとなへきとも心也
せまきたる大かく也しさてまし色おほくなる人もよも侍
らしと也すへからるを也しすへからも給へて 眠栗 窮(キウ)者(シヤ)とて学
文のるをはくらして官位なとももとえまぬ人といふ也といへ
別乃摘緒みもでまゐらせまる大かくのこゝろ也ありなと
急(セミル) 白本紀 窮(キウ)者(シヤ) 同昇 窮者とて大学乃道ありてみる乃
まへ界なるともせぬ人といふにはきて卑下の詞也代段
源氏大宮へ申給詞也
うちみけき給て 細 大宮乃深き御也

をはかくもおほくあるへかり事也紙 眠栗 大宮の詞也源氏乃何
そて御ゆへてハ官位をまゐりハなかうりと我もしかりと也
ひ大将なとをあまるをひきあへたる源あらうとうふ給め
るを 眠栗 夕霧也との位まて深くあへし給ハて行へきうかひを
とへ不審(シ)し給となん也大将ハ源中将乃事也 細 我深ゆき也
これおもさおもらうとといふとハ 栄 夕霧をも六位をも
わかりなとひ給と也
大将も大栄の御子をもなるとも我なるハ下らうかこなひおもし
なりしたを 栄 大将の御とハ大将と化服の合本(ニヤテイ)也
みなそのしてゐしの御とてわけひをあつるに
大栄の御子の御ハ四位五位に叙るとも
あさはとゆうらうせしおもらうかなるゝまりんと 眠 大将
ささし給へし 眠 夕霧六位をは怖くとはしちるを大なのに

かしこまりよし源氏へ申給也
うちとけ給ていとおもひきてをもうちを給へるなりなりとも
それしなこれ人の給よとていとうらくしき御けしきなからかく
まんなるとしめもとうしものゝ仰もえ給へとそのうしとをそ
をのつからをも給なんと云給　源氏のさ候也おとなし
くもとうしむかよなるとのんやいとをかしきさんへの給とて
夕霧とうけくしとや源也
あさなはくるゝのはらんうしの饗にてしけまちんうしのたい
をたつらるれたりし上達部殿上人　秋栄　二条院乃東院(ヒンカシノタイ)
乃ことや儒者(ジユシヤ)の字乃付文章院の堂監(タウケン)のきさく
とや名簿(メイボ)に字をかくや文章院とは学文をする所也
司(ツカサ)とる人を堂監といふ名簿とは字のを書付る帳乃
ことや聖廟(セイヘウ)は字は菅三(カンミ)と云の清行(キヨユキ)か字は三耀(ヨウ)といへり

夕霧の字をも源なる心にもそあるへきや
めつらしき心のうちをさうにしてまたしくしとはむらひ気の
給へり　秋　儒者のつくる字は付るなり稀(マレ)なるなりや大臣も
珍重の事とも
その也とも申しおもしろき人へし　栄　給は暦(レキ)とあるにおもしろき
そうの御事なる人あるへんまゝのつきてなすとむつらこともいはさ
ひしうおもしろき人をおほきも給へと　秋　源氏の清なるなといひ
て聊(イサヽカ)も用捨なく給はらぬをてみなこえけくらなる
おくなる人の給出とや曲列儒者一道の人は人くらへなる
をさうつきなとや　細　源乃清なりとてんところとてなそ
なるをもなくうまるゝある法式乃ことくなるをと給へき
中を下給し給也
さんてはゆるなくゆなしてかなるをおなし衣服ならく

ものゝちあはれなるへきもとゝるとこそちらすく
わともあちこそはかひ　孫栄　ちくとも勝てぬき候也露より
おとて流布するもうちあり蒙求なとれハうちはちはと
いろいかなることを一なるかなえるしやまうちあそ
ぬハ紙にあそぬやうなるあしきは津のまかくちすると
云詞也　細　窮(キウ)したる儒者も皆倍物もある也
むへくしきもまてなりしつ疾なる津さなりしひめるさなくよ
まりけめ乃ともまつぬき候ともやわりけさせんたちいえるへし
用ゐ心まもなぬ　むへくしく　栄　とわりのみにまてあはと
乃なし
ちるは物うくひるとなきましつきもくしつき河まの正なる所
ととえりましても竹しなるともやうしき給へれと　孫栄むく
しつとても給仕人の手ぬくなそての入つまりしいさかく

親子(へいこ)なるとてもはるゝとも敢てともなる人もちりはとんされなも
もちまてとなりあちましらひなく　孫　人間なられあるさ
またとも　栄　博士(ハカセ)とものましあらしたぬるすにさう
右大将氏乃なるとの　栄　氏乃非ともあるし此人生お伴(ミヤウハン)
しるも　細　系図(ケイヅ)なる人也
おほなく　かゝる事とろを許つるを　おほなく　細　此詞ハ貌(ヨシ)
ぬ心やされとこそふくハはくしきたる心也
あさましきとかめそめておもろまて　河　先例の文粧して
ものとの八趣(テウクワ)て許へて博士てまる座代(ミキダイ)もるさ候也お
ろもとハ盃(サカヅキ)とのさすかもうをくり昵流(ジユンル)也　細　法式
ちもしそのいハ目んて侍れとちすとかりをおほゆるやるさ
やとてあとうつさんぬるさ候也
おほしつかましとあるすもそれりとひきゐるる　孫栄　瓦畢不(ヒナ)れ

詞也うへまとあるしとハ天下のあるしと云心也大饗(キヤウ)なを
とゝのへ人数のかれんのましりたるをとゝのへんかのゑみを
ちとたりけるもかたらかやとてゆくをも大学の言ちかゝね
云をおほ侍るてゐるとひさうやとたり班常(ニジヤウ)や常にあるさ
とゝて出るか詞如へしりの十ヶ条(テウ)の一やおほし
とハ九乃字や我身をもえやと卑下をてゐるやういまとあ
るしかともえ天下の人をいふや大饗(タイキヤウ)あると云を天下の云
やとて首也家をつくるくいさしきまするたらへ人数のかをと
いふやかく九下の儒者ともの中にたねあるとのまうをや
路つらるハるとも方あるてるの也中心也
字も如く某路と云詞や下の詞をさへたらひるすんこれをも同し
かくきるとそるしかもあるたまかうしとえてゝしてやおほや
をみはゝらまつり路子 某儒者をも字とにえてゝてハおほ也を

のをまふハあらんとこゝにハ詞也 并 大学の言の詞也 一
義云く夫大学の言ハ大ね民ア心るとのおほかうを
とあるしかくをちくも事路るの首ましはと云也志
ら路してとハ大学の祖ともえてあるし志路ところ
也一義云ゝるしかもある大ね等ハ言やとえてハ天やを
まはるまつる人をとく大学の言あらんやりとや
細 大学の言ハ詞也ゆやうにく此言れともゑましあ
大やをにふうまつるしせ路つるのかをこ好るもふちする也
やさむさうま作り路子班常(ニジヤウ)に給路也
されつこれくこちりるまといふすま 花おもこハれくきましきと
云心也我ホをとるかとにもてあるさを路ハ中しく抱くよ如
しく哉くゆるとふふや
人く皆ほとろひくりしハ如きとも 花はとろすかるほらし如

心也花の笑もほころひぬへき也　細　をとめ子て花也

文なりたりしやみりやまんされてひさうなり　宗　儒者

の詞也ありあひしやありたりおほえやちくてあるも

さうしはうれのあるさたりし　一説　とこあるもそやとゝな

でそ　二説　おなるうほこんともやみえぬれ　三説　風俗の哥　文字大宮

心きこてのあるうきりし是けまれとのん也ひさう同意也

細　風俗の哥乃詞也ん／＼く見給りて座ととひきて立（さ

とてやとし／＼あるや　弄　一説　龍爲高情ともいふ文の心也

ちくうまとあるのすのくにたるその義也

さとひきてたちそとしとあるすんあるとおとしいふをいとお逸

乃んあるしひ給ひぬ／＼くいめてしさもまありとおもひ

孟　ひ座を退出せんとおもふ也

ひみちたるも出すちあらへる上達部あるとへ書きうちらへ

ちはてたるとして　弄　儒者の家内ちの道あるとゑ

かうかうくうちうとしひあるとおもひれと也

う承とこさ海とおはしこの文て心けり給ふあてたきこと

かうきるとあくこひ出のこ給へり　宗　源氏千秋の名とぬ

給ふとくてほめ給ふ也

いとくう物にふともせいもそ　弄　儒者ともの作さ也

ゑめきとあり出てもとこむ　弄　無礼　日本紀　ひろうなとの也

うしうきしうのてあるもとあるうからもも取まへく　八中く

今もとくし　宗　儒者のさ海也

あちかきんあるほうきた　弄　うちあるに儒者乃うかつき

うされうまつきこ火新よ乃んゆるとの人物ありしもちえ

華とハあらしえたるん也

冷うう海も言もしまにへきるまるあるされとさ海く

まさにいとある人無分別にも行はるゝこともありなむと

孫 儒者の座にはされたるさまの猿楽(サルガク)に似(ニ)てこと〳〵し

きさまとや 弄 猿楽ハいかしきことも有とさせたるやん

まうひつきなることとも有まじきひたる物也 大学の篇源

氏の御心をに随(シタガヒ)てことにさひしく行ひたゝ人のまゝ也

おとゝをいとおもされたるにその御有みえて 孫 河されハ立ん

源氏の大臣もとことゝ心あるまゝありかたくあるまゝ御有とハ

卑(ヒ)下(ゲ)の詞也

もとのまんしさとそきれちんとの比くさはのうちにかく

まてそ游絶へし夢る 孫 狂惕(キャウシ)せしまんようにもハ少くて

みまとのうちまくれ無力人絶とや 花 傾(ケ)惕(サウ)やはいせ

うやしみるゝんや一なもまきまんし歯とそ浮まんとあ

まき 狂惕(アナドル)やくつまきやまんせて意まんとこひくゝ座なる

出給ふ也おまゐるさんにはいせうきしるてもあちまち

くるしき物也ましてきこえまんせしまんハ面目ある事

しきんや 細 きたうけるや物とはいせうさるや源の

出死し給ふ皆ついせうさるやうあるもおしうる人

ことそうくもあ給ひ也

くにけさまゐる座にいまさおまろう宿のまゐる大学の

まうさもあるとききこしめしみはうさとの御かたにめしとく

めてたきに物にも給ひをさあるも事もてくまうる

孫 儒者の座にまえたるおにはまうてくるたに物ともく

くさうてさとや

ちうめとさいへ人ともめして 孫 文章のとうをもおん人にまゐ

みを批判(ヒハン)さるとかうされて秀才(シウサイ)とかうきん人をみなるて

細 かくるをまうるみハ源の仁恕の源さん有んくしたりさらん

とハ秀才然いへり
又ハ文章をはくらんし給上達部殿上人をもたうさへさうさうと
ハいはれしめたまふへき給　宋　詩乃名也
ちかきはんへく八四韻たくみの人をおもふかくてしめたまへて
絶句はく宣給ふ　私宋　ちかくてのくて八四韻八句の詩をいつく
名也又句とくをいひしめたまへくハ絶句四韻を弥る給ふ也
真ある殿のみしらうとて文章博士なる　私宋　唐(モロコシ)にも翰林(カンリン)
とて学文せる所あり　私註　東に秀才の人出殿の事あ
るも韻の字ハ切韻とて何字をいふく韻とそや時を
有文殿中に取韻とらて殿のみ文字ハ中平聲(ヒヤウシヤウ)の字
をとりて韻とさるるもあり又何韻ふくと源氏の
人まちもふくれるもあるや是と源氏まかへ所役
韻の字とさまるなるへし

かうしうたはの成なれハあまたるそてあそうらと縁　細　四月
ゐまてはなれたる也
左中弁うしつるまつるかうちいとさようをたてる人の三六
はらひ物ものしるを　宋　先祖(センソ)流(タレ)とともす此をのまにに左中
弁良清と云り源氏左遷の時供したる良清も能
に可居さ系図のかハ人也文章生より果をとせる人如此
袖さひくよみと何をたる絶句ならし　私　闘(ミツカ)に物さひさ
るはらもといへり
お頭とさとたるちうをたよりあるき　私　左中弁秀才の人と也
らう縁こそうたはの家すもむまま給て世中の事にはなのことを
たらされ給ふ人ここ隔あるともちて　私　源氏のはるかといへり
窓の頭るるをもつひ枝の雪とおもし給ふさしれもとく
まてるはらてとよろいのるにはまてく人あはしき為てならにつ

くらをあかしたる雪をとにかくしらて くらく 花 車胤(シヤイン)といへる人
家貧(ヒン)にして油なけれは窓に蛍(ホタル)をあつめて学文せしこと
とあり又孫(ソン)康(カウ)と云人同雪をあつめて学文せるを
いへるも唐の人なるへし源氏の作る世にかれ栄花(エイクワ)なり
きさらへれ行人をさけるに見てもとくるしめ学問(カクモン)しけ
有るそれるも桜の窓は窓乃雪に対してもいふる詞也
灯(トモシビ)とも九桜(キウレ)ともいふる淺河海にいへり不可然たく此
桜にあつまる蛍こその雪なるへし文章博士なと源氏
の奇特(キトク)なる詩秀を名詩に作る也見えしたり
雪とあるへし 細 翫(モテアソフ)也
まうしきよそてやさし清く入りいりし晋太后
孫宋 唐(タウ)へもよくし家詩なとも
世 猿丸なともあるとも〳〵世にあめてゆきもりある

栄とは花のえたなるをほめたる詞也
おとゝの道をはらくるりやめさはりれたることとらへきく
まつある絨殿むとしまもそくきこえしりと 孫宋 源氏
乃作詩をとりとやらんと略しそうるなれもさしもとは源氏乃
八作歌あられんとふゝして一段面白との詞也 細 源氏の作詩をとり
余のるしらぬるもまつ人の数ハかくてさこともとゝうえておれハあら
しけり 例乃式ある畢下(ヒケ)れ第清也 細 前なる地也
うちはらさふうくせいふるそせさせをひて 孫 入学(ニウカク)とは幼
て学問の為に入るなり其時束脩(ソクシウ)乃礼とて師にまゐる時
布を一端つゝはらひ也 花 令曰凡学生在学各以
長幼為序初入学皆行束脩之礼於其師各布
一端延喜式云凡遊学之徒請預入学不限年之多少
拙而簡試其有通一経聴預学生但諸王及諸氏

已上子孫ハ不レ預ニ簡試ニ云々　細　東脩の礼也論語ニ有レ之　自
行ニ東脩以上ヲ吾未ニ嘗無レ誨焉とあり
座して此院のうちにさうしをしつらひてまめやかにさえふかき
き師にあつけきこえてそかくもんせさせたてまつり給ひける
大宮の御もとにもおさ〳〵　二条院の東院には曹司を
作らく学問させ給ふへし
まうて給はす　花宋　夕霧は大宮へ御出あることのなき也
をハ清くも必もまし濁りて読ことそかへす
よ御ひるうつくしみて　細　学問の地也
猶ちごのやうにのみもてなしきこえ給へはかしこにては
習ひ給はしとて静かなる所にこめ奉り給ける
一月に三度はかり参り給へとそゆるしきこえ給ける
ちごのやうに　宋　二条三条此人のやうにあつかひ給ふ也

はとおほゆる給ひていふせきまゝに殿をはつらくもお
はしますかなかくくるしからてもたかきくらゐにのほり
世にもちひらるゝ人はなくやはあると思ひきこえ給へと
宋　集ツト　自本紀
大かたの人からまめやかにあためきたる所なくおはすれは
いとよく念していかてさるへき文ともとくよみはてゝ
まじらひもし世にも出たらむと思ひて　宋　夕霧の心さ
しを記也
たゝ四五月のうちに史記なといふ文よみはてゝ給ひてけり
花　よみはてきといふもやと読へし
今は寮試うけさせんとて　花宋　寮試とハ文章院ノ
寮のといふ所ありそれへ学生を請して史記の難儀
あるを不審をしるしありて通と推するに逐一答とも通と

寮試とハいふも文學の聖恵乃浅深を知給りんとて先ん
源氏の浮まふそく寮試をうけさせて学び給ひぬへし
究 是ハ寮試うけさせんとて先ん習礼し給ふなるをいふ也
学生と大学寮ふそく試をと寮試といふ試ゆのハ史
記をとりまつむるも讀えくる人を擬文章生に補もと
擬文章生とも云也凡儒業をはとむる人の始ゆ成とする
ふはそん補二大学生一灯燭料をも給て九年の間雲雪
のはとめをとりかして功をはらして後ま大学寮ふそく試
らる史記をよみまりしめて疑義を問ふ十条の中に三条
まて通するを及第とし給ふ文章得業生ま補もともよ
擬撩七年とうひそくそのまへ七年をかれハ国またつ
まいとかくそく七年の間ら学問して其後式ア省ふて課試
をとらくそん詩賦をはらる次ま策の文をかく者見り

其まる士の二科あり秀才と八方略とハ方略ハ云端
のまくすと云ふ也献策の時向題ま出てくへぬくくる之ゆ
やとも士とハ時務策と云ふ今とも云ふまなんとしたり今の世
みても文章得業生二人あるを秀才となせめに始より給
料を給て学問をさせらる人也其ハまは略の宣旨をとくるさ
ま式ア省ふそく課試でくらるる也文ハ大学の前中に器ある
時物生これを挙もれハ大学寮ふそく試て文史記を
よまりむる及第の人を擬文章生に補もを校せ人あり
是を式ア省ふそく試て詩の賦をはくらしむ及第の人
と文章生に補もと是をとも士ともいふ或ハ得業生に補し
て勅宣をも下さまて試らるる者文章生にとくる事とあり
て後更まま略の宣旨をと蒙て課試をとくるもとあ
其とも士ハ時務策をたまりとハいへとも未ま略の宣旨をと蒙れ

是は方略の試也文章生の方略をとりてなりて献策す
る事は両職の時と又外国の掾に任る時も敍位の時
とふ義也京官に任して後は不献策なるとひや或は
文章生又は得業生補して課試の例もあり或ハ文
章にとくまちくく方略の試に及ぬるも有源氏
夕霧ハ此例也朱雀院の行幸の次に放島の試の時
を作りく及第しく程なく士になりて軈て侍従の官に
任しけり　并　大学寮にての試也　寮試の宗祇
四一巻写之　是ハ学生試ニハ史記をよましむ
るや能読得る人を擬文章生に補し次の年に大学
寮にて試らるく及第の人を文章得業生に補をせ
らる擬文章生とハ文章得業生と同事にや
大学寮にて始て学問したる人を試に及第せ
るをとハ文章得業生と云也文章ハ諸国より上る人を年貢
にたてまつりけるを貢士といふなれど大学寮
にて試に及第せる輩擬文章生と云同事のやうに
なるなり
式部省にて課試とて先ず詩賦を作らせ後に策の文を
作らせ策の文の中にいかやうなる事の策の文とハ儒業の
一ツなりまさしく文人も四書の儒士ありて題をいたしかは
題の事を対るに云て不審をたてると献策の人一つ
に又対るに云く諸文を引て答る事也策の文ハ本
朝文粋の中に上の事にありそれを披見すへし
秀才進士此二科あり秀才をハ方略と云方略ハ云端
の大なる事と云方略という事ハ経義の審也何秀才と云ハ
されの文章得業生に成る人の事也方略此字

はた端のたゞすとりたてゝも限もなき大事と云ふ也進
士といふも擬文章生に似たる人なるにや
献策の時四韻にあるへきものかくことさいはたるなるにや
献策四韻のやうなる物 其四韻さしあたりて文体あり
出たる事或ハ非に似或ハ非に祠を献言語運命山水松竹
くやうの題につきて其ちなみを不審ある事也韻ハ時
に随て変して新なる事也
秀才とハ時務策と云 此義如何 答ハ時務策と云ひ
て当時の政道ある事ともをとふことしてかよろへき也
問ふことを文にかくことなるなり也或ハ文章の宣旨
と蒙て献策の文をかく事もある也
方略の宣旨と下されて式部省にて課試せらる
なり也方略の宣旨如何 秀才の人方略を給ふなる也

進士ハ時務策たるをもつて人とも方略の宣旨をうけす
進士ハ方略試也 此義如何 上古ハなかりし
文章生の方略を蒙て献策ある事ハ当職の時也文
外史乃掾にありある時も叙位の時にも蒙る也京官に
任して後ハ不献策なりしや 当職といふハ見職にや
京官の人ハ不献策とハ如何 当職とハ文章生か当職
や其後諸国の掾に文章生なるものあり国の掾なり
ぬてハ一任四ケ年也て五年めにハ京官になるなれ
とも叙位といふも此ゆゑに献策をせさるや 任なくて
も京官に任してハ献策のなきなれやるましと非成
業の人といふも多分ハこのつきの人也
或ハ文章生なくに得業生に補して課試の御をもあ
ひて文章得業生との義如何 ささ二擬文章生

といふ人文章生に擬て或ハ文章得業生となるなり
省試ハまれなる也
まうしうけさせん　細　大学寮の試(コヽロミ)也
まつ御まへにて心みせさせ給　細　先源氏の御前にて自試給也
れいの大将　抄　頭中将の事也
左大弁式部大輔左中弁なとはかりして　弄　三人
不見先生抄
御師の大内記をめして史記のかたきまき〳〵寮しう
けんに　抄　夕霧の御師たる人也
はかせのかへさふへきふし〳〵を引出てひとわたりよ
ませたてまつり給にいたらぬくまなくかたかたにかよはしよみ
給へるさま　とかへし不審してとふと也
つましるしのこらすあさましきまてありかたけれは

抄宗　史記の中に寮試によむへき所と云は難所なる源氏のつく
れる也としる所をもあまたの所をあそはしたる也　詳(ミツカ)なる
とに合点(カウテン)の所を先点(ミツヽ)たる也とも云なり　寮試にも
まさる也　細　読ミあれとたゝえたる所をえらひてして
とくる故にたゝしと見えたる也と云也　弄　不審の所をは博士
たる事をつくる也よく読とおしてそのことはりとつゝ
かへさにいとそおもしろきを難ともく難し給　抄　荒を
はかせのかゝりてそよみすまし給ふとも也　細　此人は大学
の事ゝの事へき器とへんなき也
大将はましてこたへをまうしそけむもしそてちかき
時とのもえ給ふうまてあはれ人のこゝろみてかくもあ
るらかにきく給ふに　宗　頭中将ハまとふ文字の作文を
初めて文才目出たくしまさんとやうかと申給也

このおとゝおやのたちうちうるさき道ゆくことはいくた
あはすへぬやうにかひがひしく感世るこそ給はれるとの給て
さしぬるひ給ひとおほゆる法師の心ちうもてくるはゆく有らく
なり 抄 実子の服へるに隠さく歌の言も我はしかれ給
とひつや又き道行もは常未甚にき道地の物語あると
いふ法をことあるを云也家のんハ名乗字成るや歌
の事もちうろうるを云に心得也 美濃守ことも名の字を
き道と誹せり 畢竟歌乃まゝに相とうてとて給ふ也
源氏の人々かへかくしらぬく我方をとよのやうかて云多
男は相とるへしとのんやかくあるとそ見へまくこん
さハ有まゝきと云ひしこのんやいくさくぬにもまひ
あらしてハ源氏の心へしうるまとしきことひあれとも
う感世るこそやハ我をやうるに相とるとのことあれ

みすてありき給さ由奴へし花の詞はいさうあさき歌なり
たゞしきるのまさ係はあすれとひさこそたうせし給へれことゝを
の給へり家元ハ源氏の我方をいう道ての給ふ奴へし
花ある心に道給ひをたくされゆくんや歌乃まゝにおもへる
心とあるとの給へり 幷花のちに意の字礼んや
細 道とハ鎮千の字也常未甚に書る也と
あるの法のつきは給へしてさい道それとる
法師の大内記奴へし道とハさきれくら 細 此法師は盛
さもや
うかつきいとやもくるなり 大内記さ由とこう
よのひくかくうくたゝし乃問とよるハまちひくまさんとそちらく
てあまつくるちらん給り書るを 抄 大内記ハいさうある
書とや 細 世ある人うちもうとすめくしき人也

源氏にうちあるとてかくとりなしめしよせあるなるを
あり方はあまりなるとて　抄　大内記の事也と源氏物語
てめしたる也
此うちかんを語りて　源扶助あるへし
このうへは源氏はくにさらちまちにおもとりてうるせきへしとも
してゆくさんは　抄　夕霧の清水ゑ気ゆへにおかせてうとも
あらしも人よりかしこしそあらんかし　抄　夕霧むすめの人ゑ
奴婢りんとの心也
大かたにまうりつ日は　抄　寮試の面目の事也　細同
さうまんにさせ給ひ此車ところ数をしてはなひたりたつ
たせまのころもあるんおしとりてしたるにみなくまてて
しつまりゆはくるまりなる　さうまん
大学寮也とも也　細同

くんさうの君のゐさ所　細　夕霧也
またうち侍らんひまはさらに何くれともなり侍るまいのあや
しきものとも人めちかきほとつくろひなる　抄　儒者とも
のこともくはなる中に夕霧のまうらひ給ふは細合ぬとのん也
座のすゑかうしをお侍りもとりていとものをさとみなるや
儒者の東座に夕霧は其座を面目なくおほしとおり
然るに寮試の時は儒者とて神よりと寮試は大学寮
に入るよし上座に着きて後に入あるを儒初とて
東座にはくや者人高位いしぬとも為に冠者は
も学生との東座に列し給や学生は先初為序
とらへり合の事也
ちゝみくとたちしのくし侍めとも出るそてめさせ給へ
まは　抄　あらしとの夕霧は入学の時盃とのとく

もろすをおろきてやといへり其時の人とも文ともと宮人まれハ
つきて急度したるき由をいへり　細　制止をとゞめける也
まうしをおくせ給ふとて給ひけり　文章の寮試之給ふ
をいへり
むかしおほく毎大かくれさうき法なれハうとゝめりきもの人
まれとく学この乃みちにゆきしあ問中を進せんよく世中をせり
たとへはるそをうたくしさき人おほくなりんあり由り　宗氏道中
絶てるるを源氏の再興し給と見えしたり　細　菅氏ハ
勧学院とて来を北源氏は淳和院平氏は奨学
院橘氏は学館院をたてゝまうされけるとも学問をさま
侍へきを見えしたるを
文人きたりるをいふるをよるとうちてしめ　於宋文人と
是文章生なる擬生とハ擬文章生とて文章生に

擬もろをといへり或ハ文擬文章生とも云也寮試の時五ケ条
の内三ケ条を答進は可然とて擬文章生に補せらる
名也先を擬文章生といひ文擬文章生とも云也文章院
不及第にて五ケ条なから答給と見えしたり御其及第數
なし学文の應をと定まれるなくハ一ツ向と及第といへり
五ケ条を試ゆへからも何ケ条までとあさ五ケ条のう
ち三ケ条程は答ふるを擬文章生に補して及第させ
る故へし　細　文章生及第也花名は委見えしたり大數を
あきていへハ二也方略の宣旨を蒙るの人ハ本の文章
の生也文章生とて國しよりとるをも擬文章生と
ハ云也文人とはうめんばかりの也文章ハ擬文章也此以後
行幸此時法家の試有し也
もろくしうきまで給へまでも文人にもいつまで

まうのほしう　宗　もてはやすにとりなす也
まとゐくたきまし給　宗　師匠を名誉の事なりと也
又のよを申たまふるとまうさる人をさい人ともいふとたるを
為てあそふにつゐてなところの人あはしの師とあるは
今く世になさん有けり　夜ふかくと文作り　抄宗　夕霧所業
古り切とあるやうし也
かくて后ゐ給へきを斎宮の女御をとこそは　抄宗　冷泉院
の御后ゐの事也　此斎宮の母御息所と源氏より
斎宮のことを託(タク)せられしもこの中にあれはその事云々に
うちまかせて源氏ハ斎宮の御後見ありしかハ后にゐさせ給ひて
との給ん事なへし　母宮とハ冷泉の母宮藤壺也　御息
所と宮々おほせ給ひかた給ひける也
まつ宮ときこしろしめゆへゆゑしきにかはらせ給ふとおもふとこ

とうまう給　もと宮　細　薄雲也前斎宮のことをおもひたち
ゆくの后なる也
源氏のうちしきりて后にゐ給はん事世の人ゆるしきこえす
まつ弘徽殿のまつ人よりさきにまいり給ひしもいかゝなと
抄宗　藤原の后ハ藤原氏よりも立給ふことを代々は傍まて
まつる義也　或説ハ桓武(クワンム)天皇以来ハ天下の国母おほくハ
大織冠(タイシヨククワン)の流也忠仁公以来藤原の息女まゐり后にたち
給ひぬ是藤原中宮又は斎宮を源氏の御やうに
て源姓のまゝに后に立給はんことを世の人ゆるし聞えず
されはとも藤原氏后に立給はんかたは流々の中にも日神(ニツシン)
にさしく人后となす様子のたとへ春日明神御
明神にとるや先規て藤原氏后に立給はんとハいふ也
まつ誓(イハイ)によりて内大臣息女弘徽殿の女御后に立

給ひて後紙ちと給ひなへし前坊の棟梁なりける也うち
つゞきしハ前坊と式部卿とおはしましけるとかいへり又源
の姓を給りされたる帝王の御子をも皆源氏にせらし
是とる也此内大臣とハ頭中将の事なり也
うちつゞきにおはしますは御子を守りゆくへくおほしける
字の事　私案　内大臣に頭中将息女弘徽殿を前坊女御に申されしかと后に
なり給へりし也といはきのんて無りとなりける也
兵部卿宮と申しとハ式部卿宮にてまします此人は御まして
やんことなき御方にはおはしまして御しきはめ　私案　兵部
中宮の御兄也藤壺の御せうとやさまはやんごとなき
さ御母しとなりと八式部卿になりと兵部卿宮ハ紫上
なる后なり式部卿ハ首宮乃うちにて八蜻蛉宮に
親王おもしろくて八成給ひぬと也り桃園式部卿の逝去し給

て其闕よりぞ兵部卿の式部卿になり給也兼遠生云
式部卿と此兵部卿の事をといへりされハ桃花乃失念
まやとも云給へし　細　此家上の文也桃園式部卿宮薨し
て後式部卿闕なるによりてその任し給ひぬへし
御ハありてさりとも給へる　案　一条后にてとる給ひぬや
わかれしむとて王女御と申て後ひ給を　案　王孫の女御
をも云給を王女御とハ申也兵部卿の子女乃女也　梅壺
と女孫にてまし候もあるをといへり
あるしかへ御たくなりしてまてしく御用をもへきにてそ
私　藤壺と式部卿の宮乃女御とさしてこそとといへり御
つの御事もめみえ御はと云也
母后乃わかれしまさぬ御沸なるとそれいえてしとさきて
みけるしる人なきとなりけるに　案　藤壺乃女院の事をいへり

打しあらそひ給へれと　抄　弘徽殿女御と云々女御と后
　とかくあらそひ給へとも梅壺后に立給ふとや
あるを梅壺ゐ給ぬ　細　秋好也
御さいはひのかくひきかへすくれ給へりけるを世の人おと
ろききこゆ也　細　母宮をも源ハ不幸にてうせ給ひしをひき
かへ幸人なる也　宗　母は息所源氏にもをさあ
らましゝ也
おとゝ太政大臣にあかり給て　河　大友皇子　天智天皇御子　天智
天皇七年始任太政大臣高市親王　天武天皇御子　持統天
皇四年任太政大臣　花　内大臣より太政大臣謚忠義公兼
通　天延二年二月任太政大臣　元内大臣　但関白也是より始
八連綿也　信長公清盛公なと内大臣より相国に任せらる也
大将内大臣になり給ぬ世中の事ともまつりこち給へく

宗　以中将ことも也　河　内大臣執政例忠義公堀川関白兼通
天禄三年十月廿七日内覧同十一月廿七日内大臣
中関白道隆永祚元年二月廿三日内大臣二年五月
関白帥内大臣伊周　正暦五年八月廿四日内大臣長徳
元年三月八日内覧云々
ゆつり聞え給人からいとすくよかにきらくしくて心もち
ひなともかしこくものし給かくもんをたてゝし給けれ
世中をまつりこち給へと源氏より内大臣へゆつり給也
人からいともすくよかにとハ内大臣の事也
ゐんふたきにはまけ給しかと　抄　宗　掩韻にはまけ給事
掩生には源氏にはまけ給しことゝいへり
おほやけことにかしこくなむはらくに子とも十よ人をとな
なりつゝ物し給もつきくになりいてつゝ

一 おほやけこと　細 有職の事也
わたくしの人あつかひ家のうちおさめ　箋 源氏ハ内大臣
乃およひ給ハぬとも也
女ハ女御とていま一所なむおはしけるわかむとほり
はらにてあてなるすちなれと　女ハ　河 箋
王孫人の子と云也 此女御ハ母二条太政大臣の四乃君腹
乃息女也 弘徽殿の女御とも申也 是ハ雲井雁也 此
母君わかむとほりと書給ひしや わかんとほりハ王孫の腹と云
やあてなるすちと也 種姓ハおほえある也
細 さる方の母王孫也
その母君按察大納言の北の方になりてさしむかひたる子とも
数おほくなりて　河 箋 雲井雁乃母の事也 前々ハ内大臣
乃思ふ人ふかくや 雲井雁をもちゐ給ひしとハ内大臣乃はからひ

られて按察大納言の北方になりてさしむかひたる子
ともの数おほくなりてそれか中に雲井雁をおき給ひ
中にて内大臣此君ハとるまゝもちかゝ 此後ハ後の親
にゆつらんいとあいなしとてそのことものも又はゝ
やきし北方の母大宮にあつけきこえ給へるもてひとりる也
大納言の子たちおほくさふらふや 北方後家ともなし
そまてにますをて後の親にゆつらんいとあいなしとて
とりはなち奉りて大宮にそあつけ奉り給へる　細 継父（ケイブ）
とかくのこととうるはしきもてなしとあり
女御にハこよなくおもひおとしきこえ給へれと人から
かたちいとうつくしくそおはする　箋 あの女御にハ紀殿をと
みこ雲井雁をとハ内大臣のおもひおとし給ひぬとも也
くわさの君ひとつにておひ出給ひしかと　河 夕霧を冠者と云也

もこの所は大宮にて有る由也いつれも思ひ〳〵とや
とのゝことにはまかり給て後は侍ることとみえて　箋　おとゝし
かるゝ也としは夕霧の十二歳也十あまりなるとかきたり
のほうしへつたうにかはりしとや
むつましき物なれと　孫　文内大臣は夕霧の外祖父なれはまし
き物也たゝし我をうとく思ひなしたまふとや
おのつからたちいつるもおほつかなきなりけりちかくはちかく
てをさへ給ふなるをとゝもにまかせさせたまへりけれは
しもあらぬはかなきをとめも心つましきて見えおはしけり
ひのはいせうなとも猶心もとなきまつされわたりきこえさせ
と見えしをかしう給へるをもしうおひ給へりける
細　夕霧は十二雲井雁は十四也
をさなくに見えしむかしを忘れ給はぬ　孫　夕霧と雲井雁

とのゐもとしころそなへきのとにもちゐ給ふなとも
侍らしろことゝもくおもふなとかはきは給ひちらさなれはまことにおん
おもひ給へるはあそひとみえたるみとはしつくろひてたちなれけり
きこゆるあかきんと見えるに女房こそ給ひなるくおさなるくおさなき
もなれと　箋　夕霧と雲井雁とのうしろつきあはれとすや
おとこはさこそ物をみる心ほとく見んまつあれとおほきをみるへい
かるるはなくしひまくみえかくれ　孫　男は物をみる心なとはおほき
なきされとも見えなと心物なきよは侍中にひかれん
とおきさる心とてみえ人ともやもよそくは女にてとえは
すゝめおとこは女く心のうしろしれぬや
よそくに女てはこれをそなへんかるへくなるへき　細　宰相とし
てあらしは母后をとまき
まかるをおひかなてのおもひさなれど見ゆくおもふなる

又ものゝけさなくてとめつらしおもしろき事ありける紙清
うちのへくはのくさまろも有名れと 孫 おもしろき事ひとた
ちぬるのかくぬけふくうさともおかし給とや
ありけるかくれてやさしれふも心えんかんうくしつく有なる
事し 箋 又ともこれともめ此とゝくのうりしとや
河とのさとはやうるもすてゐせるれ清いそれもあるく
のとやうにありぬる清きうれうちしゐ 孫 志夏秋をも
て大臣家へたえうとひとの清出ありけるや 細 太政大臣并
内大臣乃大饗也
萩のうへ風もさなうぬんちして大宮の清うえにうち
のおもしく気ら給く
秋ハ花のまよくれしそたゞあゝね萩の上風荻の下葉や
嫁君やうしゆかし給く清まとひうもきまり給

孫 箋 内大臣の清おもは雲井鴈を大宮乃清まへいれ中清き
ことなるや宮の事つく清うことお成もしらく力入たり
宮ハよろこひのとおくよろこひにおほえもれそひのきをはまへ給ふ
つま給 宮 細 大宮也
さもこそ女乃志てるたにつくさやうあれと 箋 内府の詞也
河 うつりの播磨云ひとつあるむ清うそ女のやんなうくしつくを成
もとくさ志てるもの也
萩うくしさ親よ清ましつそれよろ海ていしうはまへ給ふ
人おさく清くもてなしたり りうくしき
箋 上臈しとさとや
あふのかんとくれのくるんしるをとかさく紛て女のあるにそ
孫 そんしやうろ此かんて此源氏と云ん也 清よみるれともたく
人ふくまし海もとて源氏よ云ん也 花 世俗にあるへく

是かくれなきやうやまと云詞也何乃字此所と意(コヽロ)得よと也
てかうた詞也これ何ぞれと云詞と又みて何のみそくれ
乃源氏なとも以て宮ゐ琵琶の上手なとかそへたる
侍しとそ也とて 細 ちすみくれと上手をかそへあまた給也
相手さむとも此山里にこめをきけるへてそいとよくと字
侍れ 孫 太政大臣は源氏の物語とちり山里とは明石上の
きこの上手とのこと也
物の上手は後にて侍れとするにありて山かけかくれし人
今もかりて侍しもひきもくまなん 孫 明石入道正統
よき琵琶をも侍く三代の中明石上にてつたはり宮
にまいりをも上手は後とまて延喜より後は入道上手と
のんや是れを京に成て山かけかくて年頃給へとも明石
ふとも上手也のん也 細 若菜大臣の清よりて引侍(ツタ)へたる

よし前に有しこと也
これおとくいとおとしたてそこひろくの琵琶ひとく侍れとも
よろしといふあそひの如きの清しとはきよきと知るかたおもきさき上手これは
かくはりそ侍とそうしとされ 孫 源氏の明石上の事を内大臣に
侍従とも也 細 合難とせてはとも
ひきうるとふてとよきとかうまんとてそめつくしきこゆまれ
あるとの給ふ 孫 人のよりをもあひくとそよくみても如此可
是明石上はちとふとみ給くしたまと侍めり詞也
宮よそくのうゆすし給へと 宋 大文此と也
ちうさぬるすうるくしたふまにあるやとの給へとあすし
ろうひき給 孫 宋 柱(ヂウ)とは琵琶乃名をたのまぬて御後と也
さいれ以よりちとくく 宋 明石上のことと也 細 大宮の詞
猶あやしうかくてきかりあるへきりや 孫 明石上の方へくる

よそなるをとるなり
老のよにまたしらぬ女にまよひてまうでこそなれ人
てこそ言ひしるしけれ　私　源氏の御年ころまでまうで
給ふ故女をも御たよりあるを給ふとも又此事も我
身のそへて事とも又こゝろ紫上ゆへ給ふと也
又うの宮をもほめ給ふ詞也
尼君のとる所にゆつり其后　細　紫上春宮の御うしろみ給ふ也
心ときてそとも見すれ人々ならそとぞ給ふをかく河原
物語出家の給　細　御名ひそかに細まかに人々とも
女にたらむそとも思はれてよにいひなる身のうへに給はれ
とも人の御うへの給出て　宗　内大臣の詞也
女御をとくうたおはしまして何事も人々に申しおきてはつかしくて
てうつしよ申ひ給ふと　私　弘徽殿を申すとまうしつる

色よろしき人々に申しとかくまうして給とのゝ也
思ひしらぬ人々をとさへおもへるもくせにてわらひのうへの物
思ひひ給ぬる　私　弘徽殿の后に言給ふ也　細　秋好にとき
まされるとも　述懐也
故宮をとひおもひそこに風にかなしく給ふらん　私宗　雲居
の御也後に雲井の后と夕霧なれとめんとてまゐり
やうにおとゝうつろひかく被成へし
春宮の御元服たてまつれ給ひぬるとて人しきりにおひ紫へ
心をしめるを　私宗　朱雀院の御ことにしみ給也　うへ雲
井后を並とてもとの内大臣下心也
かうのみさ人の思ひ此后の心ゆへ　宗　此后上の事也
后の心とは御名姫君の事也后の御宿直（キリツボウ）とは此詞也こ此人
そし后は此に言給んと也　花の心は言なる也桃のさかる

皇 抄 内大臣のむすめをまいらせ給ひやうたち知也

又とひとつゝみぬまじ 栄 梅宮の后にたち給ふ事をいそきつゝ給ふ

との事也 花 帝此御とひまのひめうへ也立后あるへき也

立坊給ひうくるまゝにしてさきうちに人おほきやうくやうたち歌

こそ給ひけれ 抄 姫君の后に立給ひまおくれて人はのしと

乃ん也又まゐとさうちいふへう内大臣の知也

あるとうけしもおかん 細 大宮の知也忠仁公以来藤原氏

いはるもとちうるれとさやうにしうもして思ひて給ま

しきさけや也

此家の后たちすちにん人そてよめし給ひてやむ事おほしと

こおとゝ此ひ給ふ 抄 藤原の様梁（トウリヤウ）とのくゑとかんの后

なとも立さら給ひてやむるゝはうしと致仕乃おほく

御かひ給ふとや

女御のことゝもみな御ちうその給ふまゝのよけちそとをかしう

ハ 抄栄 あき后のことゝ致仕の思ふ給生此時さいふのかり

入内のうちをうその給ふとや

かくまても給ふむるゝをもおほしまよしるゝと 抄 致仕のおもて

ことまでをもはゞりしまさに梅壺の后に立給ひて弘

徽殿の后みてん此とのちとまでもうのむふへう

此御みをふくうそ 細 源氏よもそうそうしょあるよしや

おほきおとゞもうしめしもきたしひめのと行る 栄 さき

さきれおもそひゆへれ源氏ともの内大臣のうちあへをお

まうん又大宮も又あ紀后うしひまれともそ后

ゆへり給ふとの大宮の心也

姫君の御さ使乃 栄 重井后のうちのまゝ

いとをひさしうて此うの女ことひき給ふを此かくし此

さりとも　いとさしもあらし　細　いとものおもひさへなき御也
こむさしておもてにみな御めしにてたちまちさまにて給へハ
箋　うしろつきなるとのおもてやかなるなるも
さきらくひそくもそくしてそのさまおもへるかなしうめはらうかさう
けかしきを見るも　弄　弁病と父大臣御まうけ給へハちらちら結病也
とるとゆりのてつき　孫　猶そのてかろやされとひくさ御やゆり
てつきや箋そしと心へしとてさゆひたのみこさくおもう
嫂侍まうり
いとしうはあるとたるものゝかちよるを　箋　はらうつき
ゑあるやうあるをほめたるも
宮もかきくらしてひとおほしたるまと　弄　大宮の事
弁病とひともしてとゝのへ也
かくおもひをとこもしとすさひ給てかしまの御けしくおとく

よそんひきまゝも給て　箋　病かれとよしなきにしてと
しまの給也
つちのえくへりたまつくしとめいてるをまたるよきのそくれ給
かいきを結へるやとおほしろまゝめへのこすゑ侍ろくとの
ふくぬまおりのこちたちたるとおもうしこれはれ枕のうしろうく
らをはよく人なきこと　孫　呂律の二ハ呂ハ春夏律ハ秋冬也
呂ハ男の調子律ハ女也おとしは女の調子の律に此の合ひ
きう給も中らく呂をまさき侍りてとめりしきも面白と也
此も秋の風に折てあはれなる物あるへし　細　秋のうちりて折のあはれなる調也
風のおとむしのねもさもしきそのしものかなしうくて給てきんのね
めんなる孫とおやしきも物哀なるゆへ也
弄　文選中四云陸士衡豪士賦序ニ落葉俟微風以隕而風之
力蓋寡孟嘗遭雍門而泣琴之感以末李善注引

桓子新論雍門周琴ノ事アリ　それ　花、雍門周ハ相をとき
まことの大臣ハ和琴をと引給ふ故に琴ひきえこそ申しぬ
ところかれまことのこゝろぬとよたいひて
風の也きるしまかしや豪士賦のこゝろを思ひよせて侍る
ん翔ことくそれ面白きこゝろしたりとて　細　豪士賦序乃
詞也松葉云豪士賦ハ齊王冏と云人功にほこりたる
ことそしりたる賦也文選に序ともに載たるを云序
にいふ蓋袁郷舎也といへるつぎに是有苟時啓於天
理盡於民庸夫可以濟聖賢之功斗筲可以定烈士
之業故曰才不半古而功已倍之蓋得之於時勢
こゝの心を庸夫とていやしき者も聖人の名あり又斗
筲乃まことしきさるものある物をはかるますなり
又才ハ古人乃半までも及ぬ人も功名のことく

其なる人のあるも天ハ時の運なるをいへるなり雅を内
大臣の心もとも源乃勢よ天下御しぬれども我はむとめ
の立居るところハ時にてこそあるを云給ふ心あるにより
て此るを誦し給ふへしとやうに本の句を引合せて乃旅
らく味ある人とこゝろ
あまとおもひてハさんやとて　宋　太宮へ中納言内大臣乃詞也
枕風楽ようこさおもむきて　孫　盤渉調也
たゞうし給へる字をと給ひしまれハこれさ侍へく
孫　志やうく相との付物也
おもしろくもとらし也云ひやう給ふ　宋　太宮の仰也
いとくさんとうやおもん也さうこゝ事り給へるところに
とて兄ん凡性高く道なり給へり　孫宋　二条院より
夕霧の事り給ふるへし物のねをもこそ又こけへし

さもしろ人絵とのみや　細 感をかへるや
おさなきハかんもえ絵ちらしぬかれ　内大臣々書よの絵
河也
あるとうこれほかくかんのおもてちらあらん　孫宗 久書風字
文とおもるもいひくしも絵との絵つ河しの陽と
よるもとせ我ほかは河まるもろうの字よ文とも
はくしよおもちくさまかれなりとさとや
河くの陽とよるもとおまりぬらそとおもちさまかれなりとさと
細 よ字のおもてるてるとよろきとや
御とくをわれしさまるとなるるとかくとまて中の絵
孫宗 源氏をよくえろしあそてとや　その後八絵合出来た
桐壺帝 此源氏よの絵し詞をやるにさいくとよ
物せよいのとおもくもる物ありれえうやあくんいくきまて

むくぬる人の命しとさいそひとおかしひぬるへりとうかれ
物はあんらさやうに古風の絵しをは源氏其の絵
そんは法とて花絵とのとの紗まえもし絵合乃詞とも
也まかや
やうおんと人を云絵人あらしかくぬまるとおかしほかるまる
落んへるしう源とせのし絵て　孫 かくとさしてよハめ式夕
書ととふ絵子の細あんとをえひおもふ鶩為
絵ハくるしうんと也
おとうさし行人　宋 字文の和此麩とされるの如へ
第乃書ふくもあるとをはさりる物おりとてほかえ來
ひと絵いとわうわれしもあるる絵にあれそてあいくう
おもしろきれと河くとをとえ志りしとくめて
孫 文選向子期思舊賦序曰隣人有吹笛発聲寥亮

亮追想裏書遊譏之后く
おとゝをし（はらからは内げ）おとろへしくもてわらはし給ひて　抄　将る也
けくそうしもあるまじき事也　花　第二とまて将まり
して打とゝめらるとあへは遊るとはる時はこさかしら
故人の弟とうちとく我弟とをうちあるとほゝるかあり
後は乃大臣乃大宮は先帝へ参給ふは乃くめてとの升
まうさ故へしゝの母とに及へうしをも時は麻なると
をうちあしはとをけくそうしに准してゐるをやうと
細　称麻ると云く相当とうち給也
ちたう花ゆるとあるとうひ給　抄　哀之人でんやうきるは始
原藤原藤原乃花ゆるし　信る呂　此弟とうるひうと
まゆ夕雰乃みとるもの袍（ウハキヌ）ある文衣ゆへに官位よのあり給
て無る色とあしたる給へとのあいさけは文衣乃ことと

大宮は浩ず給ふそうひ給ふへし
大殿もえやうは浩あそひよんどもめ給へかうしきは浮り
まうしうともとはのうま給ひあり出るまたおちいさるらよ
にんのゆくりなさをしてうそろし給ふを何くれなると
の給へ清うしを気う給よくうちられは浩とあるあつう
気り浩ゆつきをてまゝのあるとれもくうしにほのめきこえ
はあるさまはけうしなきり給ひ志おてかこと継くまてある
給ひ　抄　源氏もおろひをとこのこ給ゆへは改むると内許り
ゆうり給とのおとを大宮すか給也それとのうま給ととそ
いつり花すは大殿の後は思りしてとろう　細　花に有
太殿とうし給ともみ源氏の事なるへし
浩ことの書ちるもとをとさうをなまるもしとら夜はちつるて
あるとてゆるゝ給ふを　栄　電升為とあるてこにまうしなる

とハゆきのみや夕霧を思ひ給ふとてさらぬをもほしき
隋心し給ふやうに家に趣くハ行末不如意のおほんためなり
大臣のゝしき女房るとハ下此を知てさらぬく如へし
いとおしきにあはぬ人とせしなるとこそやちかくおもはす　細　夕霧の
家大宮の清るき給ひへとも清め給ふなり
雅君ハよんなきを給ふなり
女房く出給ふなるやうみつゝ　聚　内府大宮より退出也
思ひつゝ人ハ物の給ふとて立給ひつゝあるとやとりこハ添そう
てハそ給ふハ　孟　大宮の女房達ハ内府思ひことの給ふ
恩し浅しとも有し
今宵さため給ひことともあるにおやしうる給ふつく清見え
さため給へなとうつ給ひて人とそ　孟　雲井雁と夕霧との
事ともみ内府の給ふなり

うしろめ給へとんのおやよとのつく　聚　さらぬめれとも也
内大臣うちとたてし給へとく也
打ちあるもてそのそゝへうれ　孟　清らに対してもとくに
こゝるなるかれのそうんともえちう給ふぬとの心也
細　清とさてにさうひあるかれ出来ぬへきとも也
ことも家のとゆめることくあるとあるとそつきつくにみ
孟　史記　明君知臣明父知子　左伝　択子莫如父択臣莫如君
日本紀　知臣莫若君知子莫若父
おさまりたるも陸られ　聚　内大臣の心也
清遣たよ打ひよしぬことみえおしぬとゆるをとるかれ
とに　細　内府の心也
うちとゆきてよはうさ物をもさ有あるられと　うちたゆ
聚　御所給へ給ふなり

かしこきをはゝかりてとかくきこえ給へと　弄宗　大宮のつれなきとも　あ
まやかし給てうやうのうちに此ま事のよしをきこしめし給ふ也
なとゝもせて心そ給ぬはさしもなりてしらせ給ふのいふめしきたにうとの
事いはてそいてさま給ひきれいつまかりてたはかりまし
けしん　なとゝもせて　細　内大臣也
いはさんうち給はあらさきしてやむひはひつきてめ給しとのへて
いひとうらしきうの折ようめ給てはらはせんされ宮のお
りしまひつるやうなる事　弄　おとゝ年ごろ事給てさん
好色のんしとのめ給し人のうちなる也
あるもてつまや　宗　内府をわそろしくなるとも也
申かさしやはのうへしめられん　しうるとも也
讒言見尚書
ようつしき給んとしもやあそなり　弄　内府はむつましき給

ん姫よもしき給やとさうめしくんへくなほとひあつるやう也
細　内大臣のはんふをしくへくなる也
度ハ石をとうくわはとヒいとちわしく　宗　内大臣大宮
よろしき給也
あしきるよふハあしくねと　宗　夕霧を姫君て給しはと也
めつらしき事なるえおもひよ世人もさひけなへきこと
宗　雲居の雁と夕霧ハいとこ也
おとゝ此事ありて女御をおそしまいめ給色はらしさし　弄宗
源氏の梅壺を后に立給ふをとうてまて度ハまつもに
給んや無ひてとりみなあのてつまと源氏ハまつしぬやう
みくる后のうちの梅壺給ん女へし　細　弘徽殿立后乃る也
此姫君をハ必立后有つきしと給ゆへ也
思ふくちに人はましるまりとしてあひつま給るくと

頼みけれとおほせて　孫　雲井雁の猶ことに人にはすくれたるなとや
下にはおもはするに夕霧にめあはする故なるへし
とのこと也
度の詞なれはおほくかたみにもしてもいとよくおはします
らんやうなれとも　孫　源氏と内府と中よからぬ事は
あるまし又やうのことなくてあはれなるよし也
いとこにて行し給ふ事をおほし出てかくなれは好きさめる
ちかくおはし給ふ　栄　絵合まけ給ひし時も弘徽殿の事もあり
太宮もさやうの事しり給ひしかは大宮にも
うらめしくおほす也
よはなるへくおもはしき法もはかなく思ふ事もなく心なきに
人々　栄　法もはかなきことなとあるまし給ふ也
人くのひとしくさとめさせ給へるをおほしさるに

法心ひとつにて人めをしのひ給ひ
もてなしの給はさやうなる心ははしめよりさし
孫栄　男くるしうとおほしてもかくなきぬき給ふ也なり
さやうなる心はなき事也物ともおほしえぬ
をとこ　細　もしくはすへてもおもふ心ありておも
ひとかしき也
二日ありてまいり給ひて内大臣まいり給ふ
大宮もいとはんゆきまうしきこえ給ひけるを
細　御まいり給ふに大宮の思ひ給ふ也
法わかきさいはひさはくなりてむつかしき法わらはさるると
なまめかしくもてなしも猶あまりなる人をおほされ
た　栄　尼額やひさいつきはくろひ給ふ也
まかなひてみなさまの給ふなと法わりなくさあるくらゐ

弄 まつりとと讀經も有て八舟のまうかへるをとくはやさ
御詞やまつりとと讀もほの字をやすらきたるや
まつみ給へる事もさしきこえ侍らんくつかた人給ふらんと
弄 内府腹立し給ふその詞也雲井雁の事也人のあるし
をとゝりんと乃たをとりあつくとハいへり 細 内府乃詞
んとゝ達ハたり 弄 隔心せらるゝとの詞也
まうくしき身にて候ハねと 宗 内府卑下此詞也
世に侍らんかきりハ法めき達ハ法楽せらる達おほけなき紀
乃てきてなくやてさこえひ給ふ達 弄宗 春命ぬつる八溢紛
めき達ハ法かたもなまんにあてて有まじきとこえひ給
つるぬにおや
よろしぬ物のゝ人にてうらめしとおもひやのきさせる人きこと〳〵とれい
てまうてきたるをかくもえ給へしとゝ内大臣ひ給へれ

とちゝと志川めかくおほしけそちゝんと繳をくしのこひ給に
宮ゐる給ふ給へる御事かのちをもうひとく法めもおほしさるに
あまりぬ 弄宗 雲井雁のうゝにやうしめしともいひやるまじき内
府の大宮をうしとや〳〵きこえとつらそてくるとやさきこえ
とゝもよろしくいふつましきをハわかひく色せとも紀らう
めゝうれとや 細 此君及大宮あるも可有なるの出来ぬ
るとや
いつやうちるふみくきい面給ふのよろひのまうさまにんとこえて
ハおほさるらんと思ひる給ても 弄 大宮乃御事かぬこゝとおもう
えてさて給とこそあるとうとの給ふや 細 大宮の詞
給まうらハつとゝしてされと 弄 大宮のうれしく思給ふと内府の
いとおしくさふとや大宮の詞より内府乃もまうつる所也
今の有しき法の世にハあさきる給ゝの心とおもうことそてまつる

八中く松さちうくうるとも　宗　内府の詞也大宮を
常世也秋さちうくまの世ハ雲井府也大宮まてろ人ヤ
さうるく世の詞也
九重人はくらは　紹　松さちうくうるも大宮まて雲井府たる
緑ひく内府みえうそくるるとの詞也
まい河めみちくれもしらひるとそうくしくねと九重人
あけさいとあうしいく内りとも人とちきさを給ひてんとたの
こわきうと侍りしに　紹宗　まつ内府まうひあらはゆるちう
とひとりのこ給とも侍りともみとちきさを給てんとく
雲井府を大宮まあつまやハ可然人のともうし給
なんとも字のこし世也
思ひ給ちうことの侍られハいとロ惜しうるん　宗　雲井府
まゝ夕霧家の世のとの也

まゝとはあめれしそとくあくし歟人の方にれいふくうちくむまのせ
うるめれ也　宗　夕霧をほめての給詞也源氏ハ源氏にいと
世の給くり　細　天下無双の有識也源氏夕霧を給し
てさるも
とうしさはとはく源氏人のこてとおもふところも　宗　夕霧
源内府のおいてまゝしきはるや
あれは常にそうはるん　宗　人さまとも無曲やうの家ハ公也
又ようしぬんや
あふちうとはれ給のをもあくしぬあくしひまうはし給を
紹　事にさうし出来くれようのさかをもさかやうれのハいくと
とうまして内府ハさおほしめきとのんや
みくめつくしきともうれや夕霧と雲井府といひ　細方井中
こもされも也

かの人は侍りきとめもいとくちをしきのみなり　孤宋　夕顔は
さとめも可然もなきことゝ也
さしもれ主上さくはしくあつかへ給ふあるをは今めか
しうまてなさるこそわろしくれ
さらにくらしかあれ川なるこそ面目なくても事達と也
ゆくさきもつひ給ちきりもの○きはなく　宋　おもくし
三言間ハ我よりしぬとのんも也常ハ白さしくもの○さとい
始ともろの用○き落葉かけつきさとのんも也
始ともさくおもほさせ給はん　孤　源氏も雲井へ参也
夕霧のことを可然ことくうさまにもさとも也
侍るよくもかく侍るなんとさくもせ給ひておもひ侍りて
あるしもてこしゆかしきをあるとせものもてこそ給はぬなきな
きんくるの我よりまゐりきて　孤宋　侍らあるなてもく源氏と

内府との給ひあつきてこそゆくすゑともきたものも侍らめ也
侍従もしさもちをちかきなんかうちなり御あはれと申し給ひ
孤　わさまなんものをもふかく大宮の侍従へくちもち池ひ
しけむたにややうのこと此出来事かなるとこと也
是多くもこち給ひぬるなるなれハあさきもしかおほしてかれ
かうの給ひてもさとそうなるなれと　大宮乃御也事かうの
給ひ詞也　細　大宮也
かきてもさんくれさるの心なんしうを侍りける
孤　郷もうの子さるとれちかくるより外給ひぬとも也
きれいとちもちわしきさとハ　細　我こそと大人々れとも也
こゝにそもしきあなもく御達　宋　内府よりきハ大
宮にて白侍ことハ思ひあいかも也
まろなかる罪とおほせ給ふへしかしきこそしれなん　孤　大宮

よ雲居の雁とひとつれとゝも御はらを給ひて人めしるしきこともや
なんそてまつりしよろしきおほとれ給ひ給て　抄　雲井の雁を
大宮の御孫にてかしつきたまふをもみなやすらかに可然やう
みと内府の御はらからめしよせてかくすまひをとゝめてきこえて
なきさんとかたらひしとや　細　此姫君を御あつかひ給ふ
時なきさんをははくゝみしけるなり
うちに御はらからぬことゝとりしきりて聞えたるをかしき事として
なきさんとてそ人にまされ給ひ給ま　抄　内府の御はら
いひつけぬとの御心也
物をするにはとかくのやうにすてひとくらきに物せんとしお
もひかへぬほとにあんないしとりこえれかみかくとし給ひなん
よろしぬ人のことゝふつきて　抄　まつ御きさきの人々の
大宮のみんなやうにまとひかくやうれしくのほらせ給て

ひとつにとひたらぬとも内くらくれなむ人の内府にけしきの
おとゝもやかなりて雨此とさとも
きこえしさもかくれ内の給もあきらかにきこゆへく　抄　きこえにかく
こと給とも　私　こゝをまつきこえさせも
むかしききこととかく人の御なまやみ御かたちんとの給へ入
なきにけるなとかくとひさかんとききさんなと大宮の　抄　給
御袖也　細　給なきさめけの人のいかやうとも
なきのうちにおもかけのみつけらんなかく殿めくるしとも内を
これにもとてなかく御人のめる物ともつとてちかくてちとくしき
とひ給へらぬやうとてらちち給はぬ　抄　給はるへからん内
内府の給也
くちまいらへんきこえつゝうとれしきこゝ　抄　はゆうちとおき
よろひ人まことも

一夜のあまたさきとの人々ゆまして夕ちらもえさうひゝくあかく
ゝらゆ　抄　一日の夜ゝしろゝと心ひたる人也
むかし物かたりをとしあんと云ひあけさおへり姫君あるに
ゆもあのくゆあかりたるに　抄　むかしとゆるとやうの御ゆや思
とちかゝる也
今のえ紀行へれいてとらくまきたるほさ由と云ぬり
兄君より給　抄　内侍のえ紀行とも
わらさ人々と心ひあらぬむかさるすく物語ひ古る式名
らそいとかく人ゆるくみと思ひあるぬそそよほりて
あられるそれとて法ぬのともとさいちそ給よ世のん
るゆるし　抄　宋　雲井有のめれとも内侍乃ゆるを語詞
やそう紀人とぬれとのるや一向すさちそ紀人のやうる
ゆもとゆ給りそ有らゆもれ人るくにと云ひくめのと法

たりし我にそ心ゆまん内侍にそまはりてきられぬゆれと
さいちるゆるとやさいちゆむい源也めのとゝもの中ゆ夕
晏まあそひ給ことゝの給ぬ人しさゝえんかさるなし絶
のとさもちの御也何ともほうするやうもちすれとも
細　内侍詞也
かやうのことへうきるさるすれ兄人とのほうつさ法むもとめもを
のつくあやまり名きめしむらし物語かもあはれと
宋　めのとれ詞也村上帝の御時康子（カウシ）親王（正妃 宮女）弘徽殿ゑ
おりしもしあるの時九条の右大臣師輔公の女なる給へる
る後かておくりゝまて此の給ゆへそ寛仁（カンヘイ）乃太政大臣公
重の母也かやう成名きめしともあるをとめつらいうさむをそ
めとまへつきうしはくるす也
ゑしきと云かはさゆるへるへき紀ぬみゝくこそあくめ

これを御覧じたちまちて里へ行て年比たのみつるを
返　これも中たちもとありて可然さとうらみて
そあらぬ物や　細勝寺へまかるは常なるや
御ふみをつかはさるれは何事も宮の御まゝにてあるへきよし申さ
しきりに申されしかともしきりにきこえさせ給ふとて
しのひつるを　返　宗大宮の御事も忘れかたきとの心とし
てかくしつゝて雲井局と少将の内侍とをたのみてやさしき
ことの御事年月のほとたつるといはれしも
おとくしたるよりは申さやられける事ともありしにあたり
にくき給へるにかはりきんとても　返　宗雲井局八十四少将
八十二やおとくし八十と十二歳へし申さやられけるとて
たくひなく八十よ八十一にかはるそれも給はりけるを申す
又給はりとのまゝ　とかく

うちまかせられさるやうのさたありけるを物よりたまはせて
御ゆめたてれきるはありしかものきこえれはしからぬひとよ
うきよをすてあるまじきものとちかひけく　宗 ねかひのかゝは
まさるよりもちかひもちとかくれあるかはりし
まさる御事とおもひのとなるとき物のいひかけてとのれ
よろしかけくも　返　少将内侍くとも
よしそくく御なりしとてはかりまゐらせてつかはされきて
御事とやまをてあらぬうちにいはひさたまりて　宗 内侍の
詞もゆかしくおもひけるまゝに宗継の事ときゝてあれこと
もひかりもともかくれありけるとしたりけれ　宗 内大臣殿
とうらうにこもりすてん宮の御かたへとはらひけり
宗 雲井局と内侍へ御返事やさしきとや
ちとたちつゝかたるとともいつとなれとしも思ひたまへらるゝと

の給へるも　細 めのとたちとかしこまの給也
いとわりなき中にもまつ其の給ふとえひく　私 大宮に
ことく更におもてを給ふいとわりなきれと親くなりこにの
御心なくさまりつるさまの心也
おるかへしや大納言とのはまりて給へんすとかへ給ひ給れ
ハ　私案 大納言のさく給りんとおもふるもおもはつかうくしや
とや　細 梅壺大納言も雲井雁のまさく文也
めてたきふくもなく人のまちハあふみのめつらしさにお
まひ給へるきんと也の也　私案 夕霧ハの小世にさうく人給ひとて
と源氏ハ今人のまちハおもひおとしてつひともうをぬとなし
姫君ハいとわりさなきをあるにも猶すてよろしの申給へと
ともひおる人をさみともあるへねくうちある丸給ていゆるして
からるへよるり給ましきかさなきへかるんとあのひてさ

なる人さまとちれ給て大宮とのまへうしく出す給ふ宮ハいとく
わりとおほしまてあつかふも　私案 内府の詞也雲井雁ハお
されりまうしまれを何事との給ともうひありまし丸と
て給ふ給ふもいろつくしにはち給ましさわさとはいかはかる
さやうなまてかゝれとやもたる人さまうちまへハめれとの中に
も可然とてかの思ひて内府殿のことゝものさわや
うにとの心也
おとこ君ハ情かなりさはましく出給ふやあらん　私 夕
霧の詞也情もむまこいとわりなき中にも大宮ハ雲井
給ふりハ何とも夕霧をとゝめおきてかなるへくし給也
細 夕霧をとハ花大殿にこそ給也
かゝみんのあるとあらゝもといくしうお思さるゝに　私案 大宮のハ
夕霧ハおとゝみんのあるとつくしハ世にお思さるゝせ也

情なくもかれさるのみやうにおほしの給へると 孫 内府
の御諚をことのかたるやうに情なくの給ふまし也
大宮の御文へし
なをとも仰しも有へき 宗 彼諚兎給まてのことみてハ
なれとの大宮ハさひ給ん也
もとよりもうしさひつさ給ことなくとかくまてうし
ほうんとも折ほちくほりしとかくにあかくまてうしき
めされたる春宮の御おとゝもおほしかまさめれう
きうしあうさんへのまとくせおハ 孫 内府ハ雲井殿と
ハかくまてうつりんと言ふ給ハさるましと大宮のく
もてなしてそうそ給ひされハてまいらせの女法ま
もとハさひうる給へとも 細 内大臣ハ此姫君をともひ
まさくかき給しと我にて春宮へて給へ物と

とかくほとし也
此君ようなる悦はんほうるへきんやハかくちら有さ候ゆうりてめて
ひとしきへあるへきらそ 細 春宮とさしとまりてハ此の時
のかとえ流人にとおへきうやし也 宗 大宮の御心也
うれしきをとうひあるさかんきさそみもやてそさへとわうなさし
のすさき也そのや 孫 大宮も雲井殿を后又ハわうやう姉
まうんへまとてそさへとゝ雲井ま大宮ののんひくにある也
て内府の姫給んまてそうしめらうき給也
おとゝもとうしめしうさひ安きなる給 細 内大臣をとうしめし
さ給也
法んのうちをかんもきあさへハまうしきめりうなうし中安き給
きん 孫 大宮の文きまにかのひくるのを内府の心給ひかふう
てかへの姫給りんとも 細 大宮の法んのうちをと内大臣

へだてをおきてハやすまずの心也
かくさせうとしらて忍ひさの是をあるを給へり
宗 御心ひきとのあるも夕顔ハありてや
一ようも人めをおそれてわけ事をとかくさうしをちかうに
しうハ常よりも意にわけ給はぬ物ゆへつくさおほした
作るは人し 孫 夕顔の事也一日の様も人め飛さは雲為給
よ思ひすまもの給ひひた帝からもゆかしくて心あるとや
宮出る八景世ひゝきしまちちよてまちよるに心八の宮語
など 河 色姫石念 細 などひ
まめたちて物よるときとやをく給つそてよ 大弐のさ
しくはしくて夕顔に給給とや
浄しと比よるまうちのおとて乃えんしてまめて給ゆしらぬ
いとちぬいとわしきゆつゝきるすえことそしも 孫 夕顔の

るよふ内寄乃大弐をと給給ふ也
思ひためわけて人よ物をるを給ひ人さか心くるしきこと
くうも予ごうくしもを人と 孫 雲井為との聞ハゆかしくも
あえるよをとひ物給て大宮よ物を思ひをも給ふ心る
しきとや
作る物をもあるを給ひてやとる人もちんと中のし給へハ
宗 ケ給よや作しとハるへとさや此物も念給ひてハと定給
し給へとの詞也へし
物よかれなることのまとちるれたるよとるひよるぬおもまて何
なくて 細 夕顔の心
何るよふ御心ん 細 夕顔の詞也
志川るあるまよまるを給ひのちともかくもへよまし
家物をさるまされた 細 学文所のよりを云るを

惟光へさつとゆるし出させたまひ給ふるとていとかうくや
出つる夕しきさまを　花 内府の夕霧を惟光とや
哀にもかくる事にてうしとふるまひたるは　栄 大宮の御也
よろしう紛人とたるまふるにひるまし給ふ所
夕霧はさえなき憂し給へとの詞也
いとくるしきをもてなりんかのうち紛とあり給にいとも
さりしものゝ事あるまし紛人とはかくに事ありてた給ひぬるや
うちつれと御をしのいてゝ人ちよりまかりぬるとは　花 雲井雁人
の文をと夕霧のかくし給ことゝや
恋しくしとひまときつれたちとはかくにあかるまとをもせぬを
はゝとさしてゝ人のまとをもせぬいとゝ御ちかくおほえてはかくし
まいるもとらるさてかゝ紛るゝは女房をもめをとさまのりして
花栄 常は問ゆかくひ給へる中の隔てや雲井雁のゆえ

隔てなかるへしはとさうて出ハくまをりひとゝくはしさるや
細 中の隔てにや
風のとゝの行かよひちにとゝまりてうちうめくにりるを物思ひ
やうてとゝ乃ほのかに出ゆかたにゆきさらすいつもとゝくおほ
歌にくるてなりや雲井のかりも
花栄 風生竹夜窓間外 月照松時臺上行　朗詠
かくとやとひるまこうち紛ぬるをひつうちうたさまに
まいらうろうんもとのまこれにも
花栄 雲深き雲ゐの雁も我ことや晴せぬ物のかなしかるらん
細 これよりもとあるにまたるは　河海同
これおもさきを紛人　栄 夕霧は隔てにをと問給へとの紛詞也
いつくしう御をとちきけれはゆ八夕霧の御や雲井雁のゝ
ひかるたてとたいをさかてゝ夕霧は詞也

小侍従やさうしぬとの給へともとかくもせいは法のめのとこちすり

細 雲井殿のあれとうやん気乃毒ま思給也

己とるもとさく給ふ事もちろうてあいはらくの分

もひさへ給へと 細 雲井殿の心也

あまれハ志てぬすみても何しぬすみくさやめのとたちゐるを

ちるかしぬうちかへしろてもくるすしられハゆくえにとと

もせは 細 第二之地也

さ夜中に友よひわたるハ雁かねにうたて吹そふ荻乃うハ風

弄宗 夕霧の事也わかき物思ひしきん成へし友よひわたるハ

八雁并乃雲井殿も我とや此心とるとことを友よひわ

たるはといへり悪別夕霧ハ心くるしくも身にしみから

さるとおもひうてハうてや荻の上風のあまりにて

んあるすや 細 うさてはかしきんや

身にしみけるにやとひつゝきて宮乃おまへにかへりてなけ

きかちなるもはつかしくやをら臥給ぬと御ま

しを見ゆるきなかし給ひてあいなく物思ひつゝけて

弄宗祇 吹よれと男子も身にしみける荻風と友よひける雁

大かたの秋のさひしきといふ所の荻の風そよとは身にしむ

細 吹よる毎に身にしみける荻の上風身にしみもし

雁かねのときかれそわくきたるさ夜艶に面白

かゝはかふとしはて法文よきほとれとこ侍従のもとえあ

ひ給へは 宗 大宮の御ての夕霧れはかなき也

その時にくさ夜にもみえたるは此もうはかれてあはれし給ふ

細 雲井ハ也へんやましく給へといふは恥そするハ法なる

こさなるへし

女なるとさしとられ給へきのとゝうして 宗 内府の給し

ことのなつかしきとも也
我身やかくあらんやかくならんともおもはくおほしつまれ
わりなしうらみをもかくうちかへし御さまなどを 孫 一向
又おさなき御心まかせに思ふ雲井雁の心といふ
うとまれぬとおもひてかれ給ふは御ことなり 孫 ちかやうふ御法
お逢えまちかやおひ給ましきなれとも云給ひぬる也
又かうきたなくいふとも御目さへなりけるも 孫宗 宰相
も内府の志あるを給はんとも此男君は御目しめさせ給ん
とも也 細 かく思ひそてらる人へさるまでもと云給はさる也
給ふるをあまりなかしうあきれめ中納言はそこともかくて
し給ふ 孫宗 めのとゝまてしたる人くもなきそと教訓(ケウクン)也
右の頼をあやしめ中将をうつ
ととめひたる人やかな人をさ御ゆかしきとも恥かしき也らん

孫宗 我とも少しさん人の御文をとらへひかぬ中たちをとらへ給
の時はさる事やと也
男君もとしもこし我ものれさとの御心ともなくおさなく思ひと
くちをしとのたまふ 孫 夕霧十二歳
おとゞはまた我身のかしこきとはしくしとおひ
思ひ給 細 内大臣也 母北の方へ御前の給はちる也雲井雁を
我はなるゝ御前ゝはなかしとなりんと也
北の方みちらう御なかさんとてしきさともかたんを給ひけれ
孫 内府の北方也 右大臣の四の君也 雲井雁の継母也
中々大人さいともつしさは気色を御らん 孫宗 内府 継嫡也
ねきさはなりも 其の人ハ弘徽殿ハ后かねとも云給ふ又雲
井の雁をも后の母御方もと云ひける給へいつもと
夕霧にんとうもを云は不興(フケウ)し給ふ節也 細 弘徽殿

乃立后あるべき御さだめにも給ふ里にまいらしぶましき事
猶雲井雁をも里にとゞめなんとひとりごち給ふ也
中宮にはよそ御ひとりとみくらゐ給ふに　孔宗　梅壺乃
后に立給ふのつゞきかくれなきとの給へり　内大臣
女御の世中思ふあまりのあまりに給ひとゞめらるゝ也　女御い
ことさらにまゐりてさきをあらそひて心やましくうちやさしくものせなき
らんさしひかへ　女御　宗　弘徽殿あり后に立給はぬ
事をいへり
うへはおとゞかくの給ひてよるひるまつりはめれども
孔　弘徽殿の上局に法皇の常にましまして女御をもさうし
猶給ふあまりにも后に立給はぬを口惜しく思給は
あまり　細同
あるべくもなん心ゆるひせさせ給ふの事なるにとの給く

宗　弘徽殿の女房達も心ゆるひとせぬさまにてかくまゐらせ
あらんともまたその達と偏るとも
細　儀よまゐりてはをあまり給はむとは御をもゆるされぬをと
雲井雁をわざさんとて先女御を帰し奉り給也
うちもいはるも給ふかく　法ハ帰りば御をも法へ御ぬを内
大臣のあくしをも御帰りてかくてはむつかしく
うちハおとなしくたはむれにたるを見そめて法ハしかくし給
宗　法への帰る也
法乞くまゐりてもとるめさすへくあまりにおそ
ひかくし給へるおはしまさせたるうらみをとられと
孔宗　女御をや内大臣へ法あありての様也内大臣乃詞也姫君
まゐりてとハ雲井雁乃事也夕霧と不審のあれハ也
井雁を内大臣へ迎とさんためた面もさハ弘徽殿の

はられのやうにおもはし給てなかなかにも雲井雁をもらうし
給ひけんとの内府乃心也大宮をもてかくるまて給へらんによめしかの
なし　細　内大臣の詞
いとさくらまおもよきをそめなんたちまちてとのつろ
まちうきさもあへきすれはとれおやまたんくそれたちなんと
案大宮おやとなんの御すまと内府の猶へり侍りしく
さしもさるやうをつくり　花　鱗(ゼイ)乃字をとさくまうりとよめ
りを角ふくまてゐる錐(キリ)也物のはしをはつれさると此錐にて
とく物也礼記内則(ダイソク)乃篇(ヘン)に云子礼父母にはへらまつる
時なるにあるる物の一也冠者(クワンジヤ)の元乃字よくして父母に
つかうまつる時の礼儀と云給はんかしく此さくまうりをと
あまえてうつくしみんひるまも宮へゆきてはゆしききさ
うちふるとか云説もあへとやまてうつる説也相成

施㦛(セウコ)ハ心やすくおもひこころ　細　はうしくはしるとたる也
大宮をいつつ説に云益気　花　細に同昔ハおほひのさき
よくしるを付る也
中の給て侍るはやつし中の給　女律に内府の語給也あへ
るえ給と見つや弁おとなしく雲井雁も大宮をも
如給へる御あまた侍あちつきさるれもまや
宮いとあへなしとおほしぬ　細　大宮
むすめを持せ給て女こそあり給て後いとはつかしく
ん侍そうるもしたうまつりこの事をえてはまゐらうられ
かつき物とよく御書につきまく
むすめを持せ給ひし女こ　細　葵上也
御むすめのさとおくさめんかとて思うれとひのはうれを
たてあつてわれも心もはしくちゃんと中の給へる

孔 大学の衆とものへ給ひとのらとこそ
うちかしこまりてかくまかりおはしますはきこえなん
さるはらへるゆゑにもあはぬ事をしたにあらん 栄 内府の
大宮への礼儀也又祖也曲もなれとかくこそ侍るは一端
のやうなるやうなれにつくしたまへるはいたはしくて
とや又かくもあるとあれはしたるとのへするもい
なり 細 内大臣の申するや一端とやけるやといひのほかに
思ふてありておほしきとは思ふくやあるゆゑとう
きそてんの隣なるさなりにまかすことなる綾かくやと
や 孔 内府の祖也夕霧に下んあるなとありのまく
まへは大宮へや給ふるや又かはりてうへてある
さ侮ものとの給ふや
なかく思ひてもかく給ふなる事はなくてや給へん 細 おほかくにも

ひたすらにかくおこなる花也
内府なりぬる世中うしのしせんてこれ法まつくく何まで
はしまつくにもひとく 内まかりぬる 栄 弘徽殿也 細 女御
果出ける也
うく侍ふはむくるしうかん給ふるをもろとをにいとひとさ
をもしてあくさまにとかく給へてなん うく侍るそ
栄 くはしき読へし
あらきは後に思ひ給ふて 孔 志なし孔祖也ことの間内府
へ後し給ふて大宮孔もく申給ふとおろそかにはいさまし
とや 白地（アカラサマ）
そらにも人をあさきを解つるとおもふをかうもなしき遠
めとり給へは 細 雲井宿をへとなし給ふるや
かうおほしなるまれをとくめ常に給ふともおほし又くもまた

きはんすゝめまいりとあるは口おしうおほかされて　栄　内府
のんの一ふしのおもひことの事をほのめかして情のこもれ
とれ大宮のいんや　細　大宮詞
人のいへることは物はあれとうく　孫栄　夕霧と雲井殿のお
さるすへきは大宮あたり心へさせて御け様成すをと云て
しあるはまさやうにおもんとへ志てさまつるたくへの心
しそうき物みて後まとの大宮あんや
わさるすれんてとも見もうまてに色てそてうやまのしるなとを
見るゆ　細　夕霧雲井殿也
さてもそてあしめおもくれ物の心をとなう志るを給ひ家
うしく我をとらんしてうくみてもくし給ふ　孫　女らうとれ
人をは此内のうきるとそれをもさもそておしめ内府の
物の心をとかくうえ知ゆ我をとうしうき給ふとや

細　親子の中とても親しくもそもは物のさひやましも
源氏とのゝ志てまひろく心みひとまとのあやまちに
のゝる給ふと伝給也
うしみてこれのみもうしろやすきにもあしくやうらみ
きゝての給はしもみさ妹君の給ふうもいはきて給ひ
まをもやとこたへるも　栄　内府子くも継母ありれて太宮殿
りんあきくいおしくとも
志むかし給の女れ給はあり　孫栄　前よ源氏太宮へいる月
まちておもろうきみ夕霧此院也をと宮給へと雲井
殿のゆくしきに我くやうまと給也　細　一月に三日あり
太宮殿のまうゆへと有しに合くみまさき也
内のおもくれは車あるは　孫　内府の車也
んのあみてもくらとうくみやをうかくまてすゝやうたに

いはれ行つり　栄　我もなをあるまじき人のうへかんとかとおもふ也

かと云ふ事也

内の大臣乃事なり　秘　右の大将下へなれは大宮のむすこ

なれともみそれらちハゆるし行ひなと也夕霧にこまる

みくらそ立ち給へハゆるし行也猶まさしと内大臣の息也

右大将殿納言書案の侍従なといふものなれともみは

来りはとひきかれとは此のうちハゆるし行へは　細　當大系

乃ち給也

右衛門督信中納言なるともさるを思ひつきなれと

秘　致仕の大臣の息也内府紀殿也余身也

右大臣の姫君なるはまきつる事に会ひとも来りつきまゐり給ふ

事なるまかゆるされと　栄　しとも右衛門督栄なるく大宮へ参給ふと也

さの時ら吾まし事を来り行へとこれ見なみる自ひる

なる　栄　右衛門督信中納言なとも大宮へ参り給ふと也

此君まて御前自ひそゑにはハ夕霧ニ此ほかおとり給ふと也

大宮の陸奥かたらしもなまとるひとあるる御目にかけるを　細　夕霧

一人々ともいかりきこえ給也

なく此姫君とそてあちらうらうちきえなる御目うつ

きて　秘　夕霧ハ雲井雁とそてハ雲井雁のとうかたさとも

細　夕霧まつまゐて八雲井雁をと大御のうれし也けるを

し給ゆへ也

請なるつさをはうけうつるき物かの御目に又ちらうる是

秘　大宮の此御気をさとそとのみ也

あくみなるをと行ひをかくかと行つくしなまるまゆい御目ゆき

細　唯とりの御給ゆへきるの也

とのハ夜乃御とことちかはまゐり給てゆゑ候つくしむく人の来

思給へとていみしうひまなきとはしらぬ躰なる
し 弄 宗 内府ハ先きにたのもしき事ありて夕霧をまちて雲井
殿のむすめの方出しあしくあらんとや下心ハ雲井殿の方給而
の御事をとりもてなしてあらんとの心なるへし 細 内大臣ハ宗
内府をいかにもてなさんとてあるへきやうに思ふにもある
と有へきにや
ほとなくおほしめしたる御はからひにもなかなかあるへき
細 内大臣の今の心中也かくこの夕霧にゆるしてもあるへきこと
ときはせさせて又ハあらはにもたて給はしとや 宗 内府の気色
夜もすからのことにや 既夕霧と契りけれハ今ハいかにも
ひとへにたゝあなたにまかせてゐるにて 縁 ありとも
舞ひとおほせとはかなきことのさまとや
人の心ほとの御もてなし物かくしもなきこと成ぬへし

ありて 弄 夕霧の宮とともにまかりて御物のくしを出て
大臣ハふるくものしけれは遠慮ともなくてはあれはせんとや
そのほとんとさしおかれさせ給はさる此哥のこともなからむ
めて 細 夕霧の心をしもとくゐるもむへきとや
ゆるしほとももちて心しらるるやうにおもてなすこそあらめ
弄 夕霧よの給ひさせるかたとも夜の下心のあるへきにハ面
をしうくしてさてと心しらるるやうなへしとや
せいさむといふとてはかなくハわさとなれんのまへにかなる
しうそあらめ 如 剡諫(セイシンイサメ) 宗 いかふいさむるとも一向
有さくハかんなるへしとやまた今大臣をもうれ給
とふとせいし給ひしとの内府んや
家ともふかきちにせいしの給ふすあしくとおほせ給え
女御の法はまつくたさとつまて 細 弟の地也

宮すもうしろもあつかふにひきすてゝたゞしく給ふを
有り 私 こゝろはさらにもあらずそこも打捨やうにひきなさ
し給てまうし給とや
元来の文みなともてそこうしろもし給ふか 箋 大宮よ
り雲井雁へ文みなせうそこし給や打あすし夜
あまりいまさらに御引給ふ文をなき給や
是をさらにとともかくさしの猶もあつかひ給はん 私 内府に
そ大宮を恨給ふとも云る雁は与りとも我かくさし
の猶を知給はんとや又云や
やむなくて見むし給へと申し給へいとわりなきに思き
はからひてさもうち給へり十四になりん物かしたまう 私 云る
雁は大宮の御はからへ有もありてはいとまさあれとものゝ也
さあるに見を給へと 箋 まことのわりなきことをいへり

いとこあうしうきあやうにひらへしいさいまし給へり
私 箋 宮すみくハおほやうなるふは見るへし 常ハ古也
細 おほくとしたるや 臣の字也
かさいろさけなきしはあきられぬまておもひまのよとひ
出しつるといとはかくしをも行ら人きられのとまきく
あはれひのほとみえく法房はろを見なれまつりしさゝるると
いのちをとてそとおひつきしと思はん見へたてあらつろひ給ふや
かくなくきをなすしは 私 大宮此詞あやうるわれぬんや
そあなんともへハいとこそなおあれとておらましか 一昨来て
そうしきことおほせてうちもまき給ひてそらくま
またのこともれ給ふとこそ恐の法めれと宰相乃君出さて
私 箋 大宮ハ雲井 雁はさるまれてハ何とし給ひけんとの心
成へしうひ給ふ此命てそ思さらくんとおひしま

春命のくちをしかに別語とのふ也
おなしことこそきとのこゝろしさをつれはおしくかくわる
らを御事　某　夕霧は乳母の宰相か詞也雲井雁をも
同しことこそいひしはかくわるくを語とよみるの也
疫はさとさ侍にわかしきうことおもしかはともさやうに
おほしまひわを語かまはてやさしくめてき雲井雁はいかよく
ころしとおほし事物とよの語かな　孜　内府は雲井雁を
かの縁（エン）にかなしう御りんとの語ともろまてにかなひさる語
かて夕霧をとらひといひ御へとの宰相か詞也
いそむつしきろにあはもしらまにそ人の思ふもくせくのいと
思くめるくとの語　細　大宮の詞也
いてや物をなしとおもれつり宮とさまを語にて御めさとうし
細　宰相詞也夕霧をとおるは浅う語りる也　某　宰相脱ゑ

て云詞也夕霧をおもふつり語りとも也官位あさと浅き
ほくろはいへり
さりともをにわか君やくはかひとも心こゝろしさを御覧さて
しめしなそをよるともあるかめもりしてまつりに御覧さん君
をのくろしろはいつもあるてかん語に　孜　某　我君は夕霧也おと
かた語りと雲井雁をこ御へとも也あるか御りかまへしくかへ
まふやまつしてさもやれとの詞也　細　おや君子孫の君女
語也めのとれ詞なれしおの字可読か
人のくらゐもよく語しきをとれてそこるしうりそるれいと
とろ御さくも御縁もしのくらひておりかるをしきを
孜　あるともさられ侍ことのふ也
めのとのいとくるしうかくて　某　宰相をあるまへし
宮はとくまゐらせをさなうもてゆかすかくれの人のかまあさに

きこしめせさせ給つかへしに物うらうしく思ひつゞけれて
ものをいひてあはれ給ふ　弄 宰相大宮にまかせたまひてと也
おとゞの御心の内とはしられハ　細 夕霧の詞内大臣の事也
さまかれなきなんとおもへと思ふかしもきもんなりしなる
かりぬへかれなるとてもこうちに有ぬへからる心ころ
ようにもてはしんとの給ふかとやうらうなりけれ
常なれハ　さまされ給ふらん　孟 夕霧の心也さてハさ
てあまり屈まんかとも　細 サワレや又さだすれと読へし也あり
まかとも内の心ハあるしのとの給ふ　孟 雲井の雁も自然の
隔(ヘタテ)とはやしき給ふとも　細 雲井雁の詞也
弄 とありてさき給ふとおもふし
恋しとハ初月ちんやとの給へハまことにあつさ給
さ侍るともおさなきほとはれなして侍り　弄 夕霧の給

つれ雲井雁もさうしられつゝさ給ふなと也
とのまうて給をまちひ　細 内大臣とりおほき也
とちちこくさとひのさし給ふさまのうちにく
ちちらく　孟 こともしうさまさる詞也
そくやあるとわちちさるをはいとおそろしきおほして
そくや　弄 おそれやとおもん侍へし　内大臣とおもふ也
見ゆへき給　孟 雲井雁のさま也
男ハさともかうれいも給ひさのふるかゆるし雲の給ひ
弄孟 さりくとともあはれし給まとて雲井雁を夕
霧の方あちら給ひなとも給ひてかるかとハ夕霧のより
なれ給ひなるなり也　細 夕霧ハかうしとちをたし給也
はぬれとも思りてまかめるかたしき給ひてあるんつき
ありや　弄 雲井雁のぬれとも色々を見ぬくと表雲井雁

夕霧のあひ給ふなりしを也
宮こそいとゞも給ひぬるよりあはれさも常よりといふ心とは
らく　孟　乳母此詞也　乳母も心つきなくなれ大宮の恙と
給はぬよしの給ひしかさてハ参り給ふやとの心也
いそやうかりける世かれ　案　梅もうかりける世かれとも
殿の御けしきの給ことハいかにも心もとなし　案　内府のさため給
ふまてハ不及申と也
大納言殿にもかくなむ聞えん　案　雲井雁の母也按察
大納言の北のかた也
めてたくとも物のはしめに六位すくせよとはやくも
ほの聞たる此屏風のうしろにたつねきてあはけなくおもひ
あるもとおとしこえ我をも位なしとてあなつるなる也
けるなとおほすに世中うらめしけれハ　孟　夕霧此わくハ小涼

殿の御まとひ出たへと云とも官位あさくて六位
みくましきものをも夕霧を縁するは雲井雁の為には不足
なるをつくやなる也
あはれをもきこしめさるゝ心ちして母もあさましく　孟案　雲井雁
のあはれとる官位のあさきよしをいへるをはしのんてもさむるや
ちるなる也
夕霧の御歌　細　夕霧詞雲井雁にいひかけ給也
案　あれにさへ給へ也
くれなゐの涙にふかき袖の色をあさみとりにやいひしをるへき
孟案　夕霧の哥也我袖の紅涙をあさみとりとあさきせのとかう
物をもとかふひあまりやそれともいしとかへるかへし
かうしもの給へハ
いろ〳〵に身のうきほとのしらるゝハいかにそめける中の衣そ

孫宗 雲井雁の事也かくに浅葱中納言と云夕霧なれはあさ
みどりとよみ給へるにつきて以て官位あさきこと也
故よろしくにかこつけたるものゝきこゆる事也なとそめた
御中納言のみどりの色とそや　細 かくさ侍へし人
のすてあつかひするいつれたる女の御ゆかしきとも也
その給ふてぬは度ゝ給へるしるしなくて見えし紛ぬ男
君八重といふ事にたる心ちもせしと人ゝしるくむねいたくなる事
てかゝる浅からぬ御しつ給ひ紛ぬ浅車にかゝりつゝ思ひやらにい
うきをつて給ひきをひとつくもしらんとすまれも
いとなるすくて待つ給ひぬ　孫 雲居雁浅葱へ浅出と也
宮の浅茅するを参り給へとあまりて給へるやうなくうちに
もし給ひ浅あるそのことくまし給ひあつけさほうし
て中納言のいとまつさに　夕霧の浅茅より参り給へと

宗 夕霧に大宮へ参り給へと也
いつきに以て給　孫宗 大宮の御もと東殿へ夕霧浅御すゝ也
うちたえれたるまつことも人々かんくさくつくしまいらせた
孫 夕霧のあすに勝あるさ侍也
宮のさめしまいのすへてあれたんかまきに思はぬにいてこそ紀
出給ひりあるをみちの御ともしやかとあはれもそく思ひ
はかなるにつまのうしき　宗 夕霧乃大宮をとよりくちいて
とく御給ともまつに然られあるなりや
いつくるあるとあるまつとてつくるをある　宗 雲居の雁乃程殿へ
雲居みらるてもとへるあまくまにのくとしあるはかなく
孫宗 夕霧よりや雲居の雁乃出しきさ侍也うとてもとくる
まてあまり雲居のうかかきてもうつかりて也ゆるされいぬ闇
也こちもてくしむとあるとことして御給さ侍殿へし

細
急に面白し三四句猶揺く
大底なハさてしみ音は其給　私案　源氏よりも五節を源
らを給ふとも其ふたつよれ給いそきせハ其給のと
とふくハる其むとの心地へし　細　源の事しもらる
五節は惟光かむすめまいる也
あふたちをれ給いそぎ給ふねとやしかへの給うそくあなと
ちうあり多かりていそぎせさせ給　細　さきもる経営有り
てハなきれとても也
色んしの浅み也　花散里也
ふつとの取りへく給うそくせさせ給　層ちハおほうと
のうれさも　源氏よりもまかるへの給うそくなと参らり
てさしらく給ふとも也
中宮よりもまいらせ給ひしをつくひのまゐるなと云ふ事

なり給へり　源氏の御事ハ大かたのこと　梅壺のもと
よも花摘給てまうしハ下仕への給うそくなとまゐる
とも　院合力を見えしたり
色ゝす年五節なとまゐらしくるゝし給しはなと
よとる其人ゝの色ゝの女ちらもはなよりもそれやうにとて
くみつましちれをわくいとてふと心ふかくしくよ給つとは
く給はてあり　私案　落雲女院御給書なにして五節も
略せしきたるなも無わ五節此の事ハ天武天皇の
吉野山にて五節給ふ時天人下りてまふ袖をかへし
まいしを始として云こと也
河海　本朝月令ニ五節ノ舞ハ浄御原天皇之所制也　傳ニ
曰天皇御ニ吉野宮ニ日暮弾琴有興　俄爾之間前岫
之下雲気忽起疑如高唐ノ神女ノ髣髴メ曲而舞　挙袖五

豪故ニ禮ヲ之五節トモ云　細　去年藤雲乃孫園也と年
はかなくてあつまりぬへきことをおほしたる也
按察大納言左衛門督　河宗　大納言ハ雲井雁のまゝ父
事也光ハ此ん非不見左衛門督ハ内蔵乃兼備の人
殿へし此両人もみな五節をたてまつらるへし
細　藤大納言乃兄弟也光君のかね也
う為の五節ふとよしきよハ御はおはしけれとて左中弁
なりけるなんまいりける　河宗　五節ハ恒の年からハ二人殿上
受領二人四人也代始ニハ公卿二人殿上受領三人みな也
されと受領ふ殿上人ゆるしまとはれハうへの五節と
云也五節乃姫四人の名　撰公卿見云新嘗會内人云
と年後ニ為新嘗會至ニ四人兄公卿二人ニ按察大納言
左衛門督也殿上受領ニ良清惟光也以上四人也殿

上人のまゐらするハ大内よりもの給へし源氏乃宗
らをうらるゝ五節惟光かむすめまゐる也細云源氏云
也されや一類可然むすめをまゐらするとうけ給
らるゝハ公卿ふ又受領ふハ国司たる人也光君とられ
五節とみ付侍り　細云公卿ニ二人受領ニ二人也受領
ふハよしきよも也さてうへの五節とハ
みなとゝめさせ給ひて宮仕へさせ給ふへきよし
仰ありしかれともむすめをとゝめ給はす　河宗　五節舞姫
人をまいらせてとゝめ給ひて宮仕させん由ら仰せ
や五節とゝめ給ふ孫乃事也や一類五節をとゝめ仕
まつる事なし近衛桐壺ニ見ゆる事なり
細　舞姫とまゐらせとゝめ給ふハ何ゆゑのこゝろか
とのまひ姫ハ惟光の朝臣乃津のかみにて左京大夫か

まろもまぬくちなるといとをしきたなるかのこおもと
めもて 哥 同帥宮女ハ源氏乃御とく此事しせらるゝなるへし
又真木柱の君一勢氏ハ真木柱の事也 但源氏のとりもた
てらるゝなるよし也とそ
かいとしにといひなされと 私 帥宮の事也 又節ハ源氏より我身のむ
すめをと思ひたるを迷惑しけるなるへし又にくさたる
心也章也
大納言の御かたへもまめならし添奉るに 花 源氏の御
也按察大納言ハ紀殿の息女となるに奉らせらるゝ也
はかるのつきもまめなるしたしうさかんなる乃ちゝ
かたへさ也 私 帥宮の事にはむすめ奉らせんとり
御乃まくるをれあらんはうくしひとりにとゝまとのほか嫉
ゐし 細 帥宮の我もまめならしてたるはやかれたる思給
まてと按察大納言をはゝかりの事なとを奉給なり
うえ乃むすめとめをとなる也
さいなめて 私 源氏の帥宮を攝(セツカン)のゆゑや
おもひておもふハ宮はゝへやうてせよはへとおもひとさて
なるを 帥宮の御心也 御むすめをとふ仕まつれ按察
殿従成可殿下はゝ源氏へ也
まひなかりしなるとさきとなく 細 前のく里分く
御消せし也
いとようきゝてゑ 花 前の趣をハ帥宮の里分てゐる也
かつきるとさしうあなくそうへきハ心もしうえてゐとく
のへく 花 婚を好係(カイニウ)もるゝ人のことも也えのとくのかなると也
まう日乃ゆかしつきてまうしせたり 私 五節をと面白れ思ふに
源氏まて奉りもる也

夜ふかくいつる月ハ下にはへれたるをとゝは源氏
しらへ給ふ事いそてらるゝ也ちとをハ帰とくまつきていと
物すくしありて弘徽殿おもひして待らんせん　私案源氏
を見よと花散里ならの下仕乃中にきてまつると
源氏へ給ふを見るとも此時めす八百目らしきと
やろ也給ねむくしきとりつる也
うちなるに弘徽殿をとゝてもかせてと待きゝめさも給
（注）禁中は弘徽殿なと源氏なんその内を此あたりに源
氏の時あやとこそし給りんとや
まつるところあしまとところちかくなるわけるりへのやうたいかく
ちをたて日はまつらひく　私案あまた人数おは思ひたるにて
常にのと独（ヒトリ）葉も源氏より行りかて給乃く殺とて
ひ給ぬへし

とこれのおとゝとこれよりもなまりつやちうとくらしひ給
細　可給人のあましさは也へとこあとも来てせてとゝや
さしまきてあいしらいかすゝてえてさよりの常ら
みあひうちへ給まにそるまれ給そての方へするまる給
とろ出し給とや
大かくの君むかしのこゝやさうるまそてものあまとも方へつれきま
もとくらいくるあやまてとしよのまてあるのあめりし給へると
こゝろのすやすくるさむとたちいてそてまのすきれあいさる給ひさ
まうるちへめてたちくれくしきみく見つやうれあまなめへ
給へれハわりさき女房あまとハひと物りしと方んまより
大かくの君　細　夕霧也
うち乃後のるみれみまとのまへ人給ふれまのもちくるるとをまて
あつし給ひぬ　私　紫上の事也源好色此待人あまなるひよ用心也

わらはまゝはゝハひつくにおほせにつけ候やらんうたかはしくそれかしも
細　継母のあまりひとさまを候や
こゝろもちあるとはきことさまに候　紹　夕霧にあひたるこそなりと
やさしき夕霧まてのことや
夕かほ物のまつさきまてにいるともたちかへるときあひしをともひしあ
かくつきおもろしうおはしまするとのまへに扉ありと云もそくらう
それかしいかにいひあらはにやとしきよろこふあはれの人にて候へとも
紹　文字の白きあれは夕霧のかくれ無候とや
あやしき事やらんむかしたり　細　恨みかゝる女
さくらのくもハ恨とみえて　宗　恨みかゝる女のかくあひて
くもるとも夕霧れのこえ紛す雲井の雁の年齢猶姫
とのかや　細　雲井の雁のまつ紛る
いまはさしくらひやうにや恨たへるとの出ことゝいうさし

さこそおもひしりてさん人見あらしきれハこゝろうにハ思ひとはと
紹　雲井の雁なりとハ柳（イサカ）ともをさなきころほとゝも
恨とのふ思ひそてゝさなきころまでもあけまと
こそしもあくしてきぬのまきをとかきたる猶す
紹　雲井の雁のむかし恨とはあまりハ只かもしかめになるまける
とらまされとさ恨かたくあるしてきぬのすそとを引紛とも
あはれともあくおやしきうちに　宗　恨みん女あるにとあるれん
あかしくやしきをなりとも
あかつきまほとよりの姫の宮人をも我こゝろさし恨をあめ見るを
紹宗　夕霧の子ながら姫をは女一の宮とは夕霧の恨ハ
にくきや宮人とハ彼神の女人や恨みかゝる女ともして
女人中ハつまり天人のをなや夕霧れたるちかはさためたる
ハ（リヤウ）紛らんとのかやされんとしるあるといふ神すさ

の御ありさまにはよそへてきこえあらはし侍る遍照
寺なにかしの院の夕顔の花咲きをさして六條わたりとゆめ見せて
かくれにしよりめんとふりの此物語の女は夕顔
の花ゆゑとものかなしきも其あはれをかたるにやあり
まして あはれはなをいつまでとか姫乃宮のありさまにも
細 我ゆゑとなるものとひとへに思ひいるにも
ふるきのことの葉そふうちつけにも思ひける 此段 夕顔のしたとあり
まつの葉ひらけしんうちつけにもなるにやありける
捨しせ 女なり袖をかさね此のあはれかなしきより思ひそめてき
細 久しくなかせりしとみえしをおもふにはすきとめる也
地乃詞也
うちかはしききこえわたれとも見えたる思ひあかされ侍りし
あかきのうちきに 此 夕かほの花かくれに見ゆる夕顔の
ゆふかけまて なかしきてわりなきをまゐらせ給ふと
あるはきに 此 夕顔に花あるとみえしを
ゆふくれしるときはいふ程を
まにまにうちつかひたれとも 細 是をみやらせけるところは
わかくしてしなかし 其 夕顔のしたにて
ふることを思ひの程とも
あさき見しやまひのうれしさにおもひいるとかたちもなくのかう
ある程を 此 みつから也の色を尋ぬ夕かほ也
みせもしことつまて 細 夕顔の月を見るも松殿の
治右府記仁平元年十二月十七日癸丑晴今夕五節ニ
参内ス御裝束ヲ下シテ長秋監殿ニ越ニ參入ス、ニ寄リテ二間
自一所下ニ参内ニテ裝束之人夕顔乃次上古夕顔範見ヲ
物見ニ次女殿と聴とかんそうかま

あそひともこと葉ゆるされてまうのほる　私ゆるされ
てとハ六衛乃官なるも赤色乃袍也　丶
きひしきことよりあまた紀ろう　箋 いともきよらに清らかや
まうれぬおもしろきことされありき紀刀なとよりまいらせ
めなれてお月見るもの後おいしく　後世なめくし
きぬおもしろく　私 夕霧年比月とをりともとやう好
きぬのぬありてされありき給ふも御ありくかそ
夕霧とうしはくんも
五節のさうそきしよういとも御かんくまうすし給ふ
とまりひ姫のうちに大夫のとさ細云夫のとかをくきたり
とめてのまゐる舞ふいとおかしきされと　私 箋 十一月丑日
舞姫参也　私 曉 モシ 丑三ヲ也中の丑ヲ参也二月れハ
後の丑也從前の丑ヲ後としそ夏のとを参れ日也
列宵 二 惟光出方寅日方ト試卯日童女御覧 辰日
節会舞 ヒヌ 波 スミ 進舞 辰日ハ五節此後乃豊明会日也
おくしうるゆるしきたるるハ大夫にくしとよまのつ
くつしきり　ゆうしう　箋 巨也御月やとうたる也　細 巨也
まのきさよをにら母めきて　細 花事さ此也何るをとまる
てくしまする也
その物とも刀のもの事るてたるやうさとへるとのあり
かうらかしをあるとらうほめくのめるも　私 物とれ
そのをとれめ花あるハ刀かてさ物也是ハ何とあさる
てく刀とある也そのかも
きよの事ひ姫ともまたハみるとうしととをひつきとれ
たとあるとしもり　箋 内宮仕ヘ事さる丶ならて典侍
のまへハ内まとも年中ともむかるとも　細 上古乙十三

のんやしと年へにけるをいひたる也
おほかたの事ゝ給へて詠しんともに 宋 源氏乃家司なる也
ひろし法めともの子と給ひもとゝめれもとう紙おほしい
宋 豊明五節会ゝ也 河 とゝめんおもとうれ女とも云也 一万葉
なゝ女なるとえめしなう事ゝのまゝとうさせぬ女のる
やかとそりあまたとゝめもと人乃る也 只女れ急ゞ先之
万葉に妻女とも云り
ここの日れ嘗はくこつうたに法師とれうもちえひゆるへし
河 五節乃様の日也 豊明の五節会ゝ也
おとめこも神さひぬらし天つ袖ふるき世の友よはひへぬれは
河宋 源氏哥也 おとめこも神さひぬらしとハ五節をも
あかるあうとうそ好つうんとのこや手とまハつるに
よるひへぬまし也 昔乃友れ源氏も年

ぬ事はとや神さふれ御らされたる心ぬるかと 細 源はひ
の五節につかへし給也 今も年れかりぬるよし也
年月乃隔りまとてとへぬうちおほしあまりあつれ給へ
ま紙とえ昔のひ給ひぬしとゝまり 河 昔をれうるにあしくて
ここと世のうつりたるをうれさにさへつかひやるを
給ひへし 細 久しくなりぬるとときて色々あるも哀なる也
打ゝしうか月ゆうともたえぬかや 宋 五節ゝ心也
うきそ心ハ今乃花とひそおほかる日影乃字れ神まとをきこえ
河宋 豊明五節会の哥也 うきそて心へも口ハ昔れる事そとにかゝ
てうへまし只ことのやうに打はゆるとも也 薔薇の苺と日影と
よめるも五節乃舞姫の日影乃かとをかさしまさる
とこなれは也又紙哥れ神まとをきこえ
影なりのえへたる也 神なる事又用ゐるれいめ

こまかしやうハ五節乃源氏にあひなくてかへのこまかなる
事ともをいひ 細 そのかミ源氏に文遣はしを結句にかけり、
たくてる也
あをすりの紙よくとりあへてまきらハしかいたるこすみう
すすみさうかちにうちまぜみだれたるも 弄 とは日辰日
なのとおもの(?)かし衣あるかくあるまたに言(?)かりしをとゑとあ
をきをたゝる也 青摺唐衣小忌衣同物也 河 青摺と云者
五節(?)蝋纈也 唐紙乃文ハ木に彫て蝋ふくて摺なすれ
は是五節の折(?)ぬれは此紙なとをあるにしらて用
之也 花 舞姫の装束丑日ハ赤色の唐衣寅日ハ青色
唐衣辰日ハ青摺唐衣赤継紐日(?)蘇芳也 青摺ハ小
忌乃衣也 源氏の文やかて縁も辰日乃衣なれは青摺の
紙にて五節の君に遣しけるなるも 細 辰日ハ青摺を一と

きくるゆへ折にあひたる也
人のほとにつけてハおかしかりけんも 栄 五節なるもとの
ちゝはハ子の綱をもちるにとのん也
大殿の君もいとのあとまゐるにつけてもと人(?)まよひあつき
給へと 弄 惟光か女の五節にて夕霧めとまるにつけても
雲井鴈のことをおほすもことはそなたかなと也
あさましくちくさしくらしきうへ 弄 五節かおかしけ加へし
いとまくしうまてなる大輔ともしとまんも扉
のむか
袖はまつしき稲乃ないのはとりまきうしうてやられ 栄 夕霧のま
たおさなき事をされたるやう経也
くもちりしをいつと心につきてしはしまへのなれさめなとも見る
わさしてんやといふ 弄栄 五節のなをもちかく夕霧の心につきて

ちかくなれにて雲井のよそになりにけることをかくさせんとも也
承和八年此宿をも紛る故也清くさんとハ雲井の事也し
過てみそきしめさせ給て官清く人をしるさんとて清く々しき事
されとしかしかひハまかりてきとて　抄　承和のころ清く人ハまことく
め給ひもさまさまにもちんしけるハみかときこえも亡き御おもひける也
あつまれハかしきのらくへ申ハうへへのおにをかいとこうてまかりて
ぬ　頭注よ泊ちる八良清くるかやされハ辛崎にてきかせたりとあり
津ちるハ性えんかるゝも也又難波にてきかせたりとあり
我か文海京の時ハ於難波祓あり我河ちかう為給附て
唐崎にて祓有ちハ此五節も祓するゆへ難波辛
崎の祓られはおひおほしへたり　河五節蒜後の毛祓
よはの祓をもするも也河島海邊にても祓をもするか故也
辛崎難波七瀬の随一也比くは津国同じてまつる

辛崎は不被然有便宜辛崎にハ五節ありて大嘗会退
出の時祓をもする也上古にて辛崎難波まて下向近
代ハ内裏にて陰陽まつりまきて勤仕之

七瀬不之

難波　豊太河侯　摂津　大鳴　橘小鳴　山城　佐久那谷
辛崎と云　又洛中七瀬者　一条　川合　大井河　大炊御門　土御門　中御門　二条末也
称略之文所説ハ東西へ下向ハ昔のことにて近代ハ御蔵
にて祓有之く此花にも祓ハ内裏にてとあり
細
五節ハ内裏にて祓をもする也古へ大国乃ことにより帰りて
かき除也
大納言もてとりくにさらしもへきよりうせきも頭注
宗
祓の後気しもへきとて五節退出とも也
ある給ひ申されも人おもしなとおもかりてとかおかれと　抄　是ハ

自然女子なと絶をたすねてはとかあらはあれともそれ
ともとめ給とや
うきこともとめさせ給　細　五節よりいあるや　弄同
はのさも内侍のきをとあまさるうはとすさをたまへさも
やうくうし大夫のことおほつるを　弄　宗　惟光か女
を内侍のともをあまたまれハうまたは又やうにと奏
太子かく源氏よりされハ弄をさやうなと同心し給と
やうさりけよしとハ源氏の法接助りんや
かの人をもて行ていとくちはと思やりてし此程く
ら弁なとかくものをあつくもとハ　弄　少弐の方なとや
是給へも内侍をけよ嫗をと口外しとや　細　少弐也
ちひかくましものをとて入あるとこに　宗　少弐当惟
光は法手を育く法続せん物をうちのさるへく文

は官位をもあきまれいと早かりや
ちくまてやさしきんるをや　宗　てとふさる人し
ともとの心とふれあしねと　弄　宗　それ源と大とこ心もとむや
雲井鴈のことをこそちろへく惟くまりてみと也
うちとくくあかさくまつりて行くもかり　細　雲井鴈
ろうにくちらへくや
せうとのつもりハ度上まつる法に此君は気をつとうまつる
をとまいうまをあつかしうひ行てあせちハ何う
由ハ気ゐるなとひ給へとしやこそハさく待まて宮の也
せうとのつもりハ度上まつる　宗　惟光か家のとうせちあり
又大弐と同年也十二とや　細　此五節は惟光の兄弟也
くかのいとよつきしハさるくろまてそ恐てくされ　宗　少弐
五節か此とあひとその給也

まことは□に侘しき人をとりやまひしきをも又なんもて
業平との給へる　まことは　師説　業平か事といふ義也
古人只丸か也ところとて業平日本紀に今此字をとい
まし読せることまて略してましところ或ハ宗
也とも云へると　私　まことといふ也ちんちと云義也　細
いかてかさは侘しくなんまつりきてもえ見侘しきて打のこ
りしかいてちかくもよきを侘しかねハまし給ひいかてか
たちみそ法師んせさせ給はん也さして給ふてどうとにと
て終り　師説　太郎の御とりを見渦也女方ふそえん法説
しさもましきとの返答也
されともかやうのことといふ心ある物をとるしかれとやあてく
終へハいとおしうてまてやぬ　師説　彼御とりとの渦也性空
か新を自然事なる文あるとともきはくあるといふ物

いとせうしあれと女方の打あて終へれたとえつき
ゑさる也
年の頃とよりさハさ□てや育さむ打かしと見れまう
太郎か年よりとおとれんや育さん女方の文ま終
てあるとせうせうか見んさ院と也
見とるようもとやうのことをまこさくさねあるにてハまること
とハつきれとおいさそ見んとしあけてとおもしあり
宗　六位の人の文ま身みさうのうちやうしをおるまやこ申
しさ見ん苑あるか也　細　六位の袍のまとをまとは
日数ふとも忘るうをめやし女子か裃きぬも袖よりきもし給は
師説　女人方の義也本あるとにあるくかしきたる毒をと日数
のうつしさいふ袍をる此時かくる物也されハ太郎かきさ
取日数のうつしを女方のことを業給ハそれとみとも忘

るくらんと思ひかゝれるとし女子のちうされし紗よりきて
むかしのうへをとめたまふ五節をたてまつり 河 摂社
桑子もちりもを幸綾女の装束を我心のまゝたてまつると云也
かならず見るほとに 細 見奉也
ちかぬ中とこゝまでうちそへうちあきまきてさへひき
くさはは 栄 文の惟光か大納言なる所へ上風をこゝろみるとも也ぬ
しとゝめてさての立派のふみ取へし 河 うちも也 世継云ふかに
そのゆへの花へふかくらうきそくましくいきくの手
思ひとも云 細 惟光文も也
あそびの文の中にてうるに持てありくてやるまとよりくぬ
こさしきゆうとふてめえせうかてくもそていくさとりひとのなそて
ふさうそとて人そとの大さなの君のをさくの絵をくつるを
いくや 孔 いかやる文の中て惟光有てなるに五節の

おりてありこたる也
冬絵あてくうちゐるて 細 惟光よろつこひまさる也
かくのみならくしきこえのほうされん也 孫 大納言の心こひをとなる
清心とゐ也
さんちくに行るしこうしあれとふくひるくちふれのあるに
あとほめて 孫 栄 せうとくをなして海とも也 世継 式 祠文
行かの物語のとさんち所とくありつてかの物語を
とさむちへなんそろへとゆへのう文君の肯也 細 後本也
ここえのもみてこれえのたちのまことしへのすにおほしぬ
あかくまつて 栄 大納言のことをほめて五節の母子を
見へをたる也
おほろされ宮はりへのちこともなさってまし 孫 うちのえ我ちた
名の禁中心がはつうり大納言になりたまさとの惟光

心もおさなき程にかくれ文はひとの心をもみへし

とのゝけしきをさしてとみるにみそめ給てん人をはなれとは

給ましきにいそのとゐへのかれあるへきのこととめし

まやかくましきをしのひと 聞 惟光源氏の心はせを母に語也

みるにつきこそきちふたり 弄聞 惟光は先にかくあるも心ハ

五節内へ宮はつかへにまいる様にて乱て座席をとると云

用文の詞は乃あはのやかにかましとは御不上

の稲乃やうに五言の文字にあひまて稲やあるへん

とはいふとも申さしあらはれたる宮つかへはいそかす

もて席をとると云ものかとく 細 夕霧をおへて

とも詣たち侍也

夕の文をとへに文部から給ハ 弄 夕霧雲井雁乃

まへの文 細同

宰相まゐるさればとてめのとあつまりてはとのみなとも

思ひなくこひしきを書きて 聞 雲井雁の事也

又おひ出てやとおもふ御心のうちあるへし 聞 てとまと

あるへし

宮の御はらもあひ見るかくてまいり給へは

聞 大宮へも夕霧まいり給ひねとも

あかぬもしかしこしはつれなくそひし二人のこと心思ひけるまゝ

きこえ給ふ 弄聞 大宮よりうちにまた雲井雁と夕霧のあはひし

二人をとゝおもひてかゝるうちも思さへはなとは三条の大

宮の内にも雲井雁を別して二人とおもひける所とよめる也

思ひ入つゝおほし給て 細 雲井雁の事をとおほせるつま

とらるゝゆへに此三条宮をわかくおほしける也

又おほやけ… 弄 三条の宮をわたりにまいり給と也

とのハこれ御はゝいふあつかひをまかせ給へる　孫宗　夕霧を
細
源氏ハ末代の御為花散里に預させ申給ふ也
夕霧を花散里にあつけ給ふ事ハよく〳〵心得給へき也
大宮の後世の為もとくらうとあらせ給ふ事をあらんのち
をかくおもさるゝ紀ほとより見んすみしてうしろミ相ねせと
申し給へハ　孫宗　大宮の御年寄たれハいく程もなし
まうしさまハ花散里におほさるれハよろしきとおほされ
さもすて大宮のあつかひせ給とも夕霧のうしろ
ミとの源氏乃後見も其後ハ夕霧ハ恵比むなく大宮のた
なくたて給ふようにとてなく成給ハんよりさきより
ましきとの心也
たての給まてなれはなくてあつくうあれはまてにあひおもひ
まり給　宗　源氏よりむ給はぬにて花散里に夕霧

を預けよあつかひ給へとそ也　細　源の給はすらくにし給也
後の人にまかせおきたまふにとて給はるを思ひまた
しあるゝれハ後人ともにも心をかけひとりて給ハ心の思ひを
と　孫宗　花散里と夕霧の見給乃時見給とのゝ心也
みはし給へとも志しく見とし給ぬハ誠の上﨟し
きさ後とみつまかおもぬうちとハ花散里おり
たちよくもちたよしや後人とも志まて給ひね
とハさ後とちもるれと源氏ハこの様まて見給との心
也　細　夕霧の花散里と後の人に見給也
わかおもちにはらくさくの御けちうとんよそまてうひ
さとうしもおちうさむうや　孫　夕霧の其外寄をおれかちに
思ひも其国のことも也源氏ハ花散里のうちよろしきを
こともこらの見給母をとらうら給へし如へし

かたきものゝうちにもかゝるあはれなるへしとてあひおもひしめと
云ひ　弄　花散里ハさとも女御なとの畢竟くらへかたみなよ
らぬなりんとなけとも心もみえたり
又むかしのひとをみるかひあるへきといひしをさなり
うちそひたるあはれの絶ぬかちの悪かるへきと心も　箋　初聯
えらめおもふといひしもとくさいと也　細　女御の花散里の
さ侍とそいふ也
かく中年へ絶またとこのくさやうなる恨もうち侍らぬと
見給へ　弄　花散里の源氏ゟそひ給て年ふることもさや
う御侍るうち法師とハ源氏の花散里のうちわれあし
ことゝいふく絶し給へく侍絶をとるなとも
た侍ゆゑなるまの色をそ侍しかむしてまふかくれとまて
ゐのまて侍りし給めるをもむへなるまとと思へそむつ

くらきまゝ　弄箋　色ハ木丁なとのかけにみえぬものを云へ
里なれとうくしかたの几帳のしるへとに花散里とみ給ひて
まいりなむむかひ給ひて心やうやとまいりて見
給ひとてとおもひなりてまことは女御も花散里のこと
ちのあはれにあひもさなへともこのそくひあるへくたる
まうてそひ給へるもつゆしうるまなるかとハ女御姫花
散里のうちよりしらぬるをもとにも給ひさへとる
けりしかハ草子の批判の詞なへしあはれなる夜はふけ
きこともなかひしかるともにいひなとる
見法然のうし我をゆふまかへなるんと思へとたく
にあらぬとも　花をのみゆかとハうちゆ兒のあれそ几帳の
惟をとふかり箋花物語寺廿云袖もちまきあのかたるまの
ゆる猶々の色ゆふまやあれんしくへと志る也とも

是ハ宮のれ給ひさまとなきさへたる也 私も
女とハみくまのゝ浦にある事也几帳のうちにひきいとも
たてゝあらんも 細 几帳の内にてなどこそ常ハあらめ
てあるハ心うしとにいふ心をかなしき事にいひなして
大宮の心ちにおもひしもときこえ給ひしといふにお
りしにもうらみにもしいひかけ給ふとのちにもまた給へ
るを 孫 宗 是ハ尾上に成給ふ清年まきれなどもいひける
こゝろになる也さてうしろなる夕霧の人をもうちよ
き給ふとなるを清给ひしなかしひめる也 細同
まとなるをもくれなるも有る清なるちのやうなるとも紀を
ゆくうちにゆ尾をくに 宗 是ハ花散里のことくす
給ふもなれとちや宮の批判なる細也そしらハ
しるき成申りとハ夕霧の見給ひての心を批判してい
清かしとく渡るなとかくきこゆらし花散里也
年比みなことも月の清きのそくなると 清くしもに
たてるなると 宗 くらへ宮よりてへし
宮ハたてこれ見るも不の清くりとましろ幸年なり御紀
給ひかなりてのきくことにまてゝ渡り給ふと 宗 大宮
八月の清まえと夕霧ちるとのことゝとゝへまゐりて
夕霧とも 細 夕霧の祖母宮也
見るとも物もくのなどの事ハつゝましちるを心に在らせり
しも内へ参りもしらぬひ給ひになりに 孫 夕霧の心也六位
のみこゝとの事をさまくにおもひ給ひや又源氏のあま
りにも清あいりひ所思ゐるにかくまなく六位なとを
白わらくめ清しめ給ふや
行かなくいまもまたいかにとなる給へも 宗 夕霧もさこそ

見とおとゝのかくえ給はぬとき一日も出仕し給はすき
こゝろはよわくてかくの給也
ふとかくしもあらんおもひ給はすさらん人のやうなるも
の給へれとの給へる 抄 大宮の詞也 何とてさやうには
の給ふ也
おほけなくかれ御しむちそなるやとひとりことちなか
うち渡くもてなし給へり 抄 夕霧の独言也 おほねとも物
をさへまゐりおほえたる心ちはするなり 細 夕霧詞
かのことをとかくあらんといひかはしつゝ宮をもうらみて
見給ぬ 栄 三条宮の事を夕霧いひ給ふやとの大
宮の御心なるへし
ゆかしいはくちおしきをみへたる也とうちうちては
うちかれあまりさためやうにかくれなきしるし給ふなりけり

なかめかちにおもひ給へき 抄栄 大宮の詞也男はかくしみをも
ちかく人さまもみもしたらぬなれ給ふそと夕霧を教訓し
給ふなり
ゆかしいふの給 栄 さやうなるはいかくしきなうや
ゆうの六位なるとくのあるはかり給ふれは 栄 夕霧の詞也
さりしのことやうなく給かれと思へ気色も給ふるてもかん
抄 給ふは官位をあらんとの心也
こゝろよくおかりものさましへんとわれすてもくへはおもふ
らまゑ給けりましこれとく 細 葵上の文也
抄 思へるそぬ親のおもをもれと 抄栄 特膜かしぬ親子て源
氏はもし由でたりとも源は葵上のかたにかりもましま
をゆくにとのつくもからへなき給とも
いとおしくしをれちとおひはゝされたるかりしまいはあ

なりにたる御よそひもあらためられたまひて　細　あくしうハこと
ことしき也　孟　うとくしきこと也
ゑんうしなへるんすくのさちもんおもへちかく給　孟　源氏東院
へ渡給の時もうるさく夕霧の乳母付給と也
あえの渡りそそありて夕霧ハ押し給へ　孟　花散里夕霧の後見
よし給と也
おやと一所おりしまさ御しりたまふてとをさひ給しまし
とてをまさられたるをまきらかし給へるなとしこさふらう
はらはるるに宮ハいとほろくかなしき給ひくそくに
とくるへきはとくくまつをて　おやと一所　細　落下也
孟　此上夕霧の詞也
さのこそあられたまへとよのうしきくにくへとあまう
たちおまきて　さのここそはられたまて　孟　さやうのここ

そやうと渇へし
とふらふに心入もありけなくさるると　弄孟　宮ゐもきれハ月
御なんともとふらうかなしく思たまふとも
思ひまゐらせ給ふへきを押し給へにおもくおはしますらうに
押し給へし　弄　おほかたのうきを給ふとも也　とハ中もとめ字也
限りある花はうきさにくをたちまつしてこくをちのと中のもれとこそ
なられもぬきたとのお頼るる所　孟　源氏の渡りすやたる　おもく
おちのやうに源氏ととぞのことやせんとも思ひとくして参
とふうる時もぬりとも於のあさとも御あもくれしとを思ひ
との大宮の詞也
うちのおとくれんさへともるへきのくすハあしうもとせん
ともめていつまれとむしにらうるものとる渡り給ふ
ちるうさらをむめしそれ　弄　内大臣も常のへ

みえける人ハ奇特と世にもてはやされけるとこそおほえ侍れ
しけるなめり殊ハ節会の御とも何事とかやんのよく候
つゝきの給ふ候へし
おほいさらにときなんさへかくあらすなりとも世をしりて
つかへれいにとちかくよりしれたまふなる
きおかしきに　案　夕霧の事とのたまふらむと
も世中にとかくありやうにかくしめ給ふと大宮のいひしき
とのんや
大殿ハ源氏なりきしなきれはのとやかにておはしまする
注　正月朔日なとにも摂政なとは所々へて御ありきなし
ともちかふへきやうにと源氏ハ卅三歳にて夕
霧ハ十二歳なるへし
うちさしおきてもあるらしにあらはるへて

白馬ひき　案　忠仁公良房ハ清和天皇乃外祖父也し
法会にまかりひけさせて八儀式をも摂政殿へうつさるなり
さきは白馬節会等も皆うつさるゝ也へし　良
房の例をひとえに源氏摂政たる故にうつさると也
也へし古き家の事とも禁中同前なりとそ　河　光仁
天皇宝亀六年正月七日天皇御二楊梅院安殿一宴二
宴飲五位以上既而内厩寮進二白馬并騎莆進五位
已上装馬ヲ是白馬始也　忠仁公ハ白馬事旧記未詳ニ之但宇治
関白ハ以テ例ヲ被ル之ニ猶勿論是白馬初ノ法院宮之故
也忠仁公依二外家一ニ准三宮宣旨ヲ被ル之ヲ是宇治関白同之
仍源氏太政大臣同依准三宮被之也
執政准三宮例
忠仁公　貞観十三年四月十日為准三宮

昭宣公　元慶六年二月一日准三宮　一如忠仁公之故
事仁和四年二月十九日更賜之依ニ頻固辞ニ不レ受之更也
貞信公　天慶二年二月廿八日准三宮如貞観故事同
九年五月廿日詔シテ賜之
忠義公　貞元二年三月四日准三宮
東三條関白兼家　寛和二年六月廿二日　為ニ摂政一蒙ル准三
宮宣旨ヲ云々
良房のむかし此例はしめおこなはるゝと引事後代にも其例有
ひさしかりけると良房公の時のことは不見ほどなるくたまや
なりしかしにとるを上表御ありて一勅書馬と白馬と出さるよしみゆ
まして白きもの此くはまりに白き物はまたくみゆる故也
七日の節会とはまさる此宮会ともに礼記の文をもと書る
也細忠仁公也　准三后は忠仁公をはしめとしあをとるのなるは

未勅授
むかしの日本にはちかしきまで有しかば昔の定めしよりは
はやくかへりくしてはしきは有しさ治有き後なり
めしよりも事をとゝのへて行はるゝ也わかしきとは厳
しきたる源氏の治は始とれんも　花内の儀式をも模をは
書さるを引まはる寮此頭以下佐まもる義式をとう
つしあるまや昔のさためしみをる事とへたるはよりしさ
の始と此時の御事にもかゝるへ此くしき有始とさるゝ也
二月の廿よ日朱雀院よ行幸ありしをきさるゝはまりしきに
とるかれと　行幸とはなるありしは其道不度
なくもとめる事とやは朱雀冷泉に清和ありるや
されるは行事は此由へ必行幸ありし也花河花可為
河御記云延喜十八年二月廿六日己巳是日太上法皇御ニ朱雀院一云々

此月彼岸紅九條大臣天暦二年三月九日康保二年十
月廿三日安家殊桐似見えて
花 雖又子らく時行幸上皇宮行幸例天長十一年正月
二日仁明天皇幸淳和院見國史天暦十年正月四日村
上天皇朱雀院行幸母后御同宿謁太后于柏殿見
李部王記ニ後冷泉院行幸此不揃亀山院ほうに文永
八年正月行幸後深草院ほ不長講堂之時有沙汰
爲中門下御如朝覲行幸被追天暦之例 細 仙洞
へ行幸ハ每年朝覲行幸とてあるハ父子の儀なるゆ
ゑ是ハ兄弟にてましませバ此行幸ハ常也但揃異に
其宮をとその儀にあらずしてあるとの旨をさしてし也
またまた冷泉院朱雀院の儀侍るとき侍るも
見えてさしあく母仙洞へ行幸ありける事もなきに

幸成りのや
やよひハ後宮乃儀三月なりとて秘かをたる櫻乃ミころとも
ありしも花れも 宗 藤雲の御三月なりし也 細同
院々色御ようハことにほくろひかんくを給ひ行幸まひつう
まつり給ふ上達部みこたちよりはじめ各つかうひし給へ
宗 朱雀院よ行幸ありし御用意也
人々これあをうたに櫻かさねとそ給はつハ何の色ありけ御そ
なまめきおとこもめしありて参り給たるもあるハ色あさき給へ
も 秘宗 青色ハ麹塵袍ともいへりそと極﨟のきたる袍也
櫻かさねハ表ハ白裏ハ赤也ほつハ赤色の法うなきハ赤相
多也大かたハ人をきぬるも也されども事上云ふ太政大臣な
どハ同赤色とも給ふとも也 花 内宴日より上卿ニ事ノ一云ふ
者兄君春宮文度上賭弓時如此見ニ西宮抄ニ青色袍乃

細 下襲（シタガサネ）ハ桜かさね或説青色と見るもあるやうに
麹塵也此青色とハ天子の召るゝ日ハ束帯也云ハ
うへ上下とおもハしき事を見せけるや
いまくましき物とうやまひて見なくしまうちきみ達へくのさう
ぞくもいつくしきとなり 孫 源氏も太政大臣なるゆへた
此中と打ちて赤色をと達へたまひよく細殿へ入ると此
らや清ての名也
紙もいとたうたい殿上の侍しを殊に
清き御子ハ御くめきたる此ゆふたくまを殊へり 細 朱雀院也
宋 朱雀院ハ紀をいはうゆへいさうさおほくおかしき事也
きさふハわさと此文人をめされ給ひてその清ろうして也やは
あるかく生十人をめす 孫 文人とハ儒者也学生とハ大宮の
御事を人ゝといふ事なんかする也 細 さきとしたる御ス文

とハあり紀也
式部のはかさ此ころミの題まに仰せへまゐ清きとい給ひ
孫宋 禁中式部省にて勅題にて詩作ることあり是を
式をとおもへうつされあるや 細 勅題と出さるゝ也
大殿の太郎君乃ころも給ひつ紗へきゆへ大宮の
細 夕霧也 宋 夕霧の及第し給へき事ることなや
打くろとう紀物とも八物ともお思ひまして はかなく成ゐる人
といへり腰痛（ヨウヒヤウ）あるし さまの也高慢（カウマン）なりといふもあし
色慢もゐるん奴へし 細 腰痛と云也
はるかな舟よのかまそていきたるまれいそく 宋 禁中丸池
乃舟に乗りて学生とも別くにゐて詩を作る也是ハ
又御談合さもしとの為也 河 うつほ物語にも見ゆ
さまくろきの題給ひてひとるきあふにのさくましてまさ

里別ありしろき文体く書る事を士におほされて其時の
宣旨をくたされぬ放嶋試事朱雀院乃試ハ学生
皆泛船(ゼウセン)して中嶋に行て詩を作る也文章試ハ式部
省にて行之省試是也今日朱雀院にて行なはるゝ
やうく 花 放嶋の試にハ詩をたくみに高名をもとむる事よし
あらぬや柳ともへなるきもと云り 細 放嶋ハ文として中
嶋人もうよりぬ事のやりて詩を作りもる也其後ハ
自然漢合あると沙汰さもし此為也唐朝ニも進士を試
るふもんもうよハ仍る事なをしこめてとさえて又を
くせる也
いとも人なきとなり 宗 ゆちうんかさのあかれん也
日やうくくるとてかく乃舟ともこれまひく 宗 日のか
ちうくるを暮うくとの心也

綱よともこうほうかと山乃移乃さこさ打つけりくろさ
あそもきうろに 宗 舞楽をそうまくる気色とくのゆるん也
失さ乃見へうくろりしきさ乃あつて世ましらぬはらひぬ
ある死物をと世中うらあこうおもほと行あるとま書てんま
如何とに 花 夕霧も放嶋の人数にて舟に乗給ての人也
管絃あるとにまうらひおそもん物をとわうさいり
うしやさしてうらうあるくとてぞや 細 楽あるとさうろう
てともおもそひあへさ物ととおもほもや 花 其時も其旨鳴の
むう此花の宴扎ほとおもいそて
楽あるくか有しとも
院乃院乃文さあるとれとカそてんやとの後へもるうにつきて
花 宗 此院院ハ朱雀院也此ハ花乃宴扎後ハ院もこう移乃
うすハ院猶せぬとも其後ハしとりカうしもとも 花 院乃

比ハ桐壺乃治世也 弄 花宴巻ニ春鶯囀をま
ひしをおほし出るなるへし 細 花宴に院を桐壺とす
當代乃治世也朱雀院なるへし
その世乃事あはれにおほし出つゝ御ひたちまうける
孟 源氏の詞也
おとゝ院にはらうしきを給 私 朱雀院へ源氏御酌
なと何る也 弄 法先やくなと給ひえ一説 孟同
鶯の囀ることハむかしおほえて花乃あかそう
ちかる 私孟 源氏の詞也花乃宴の時も春鶯囀ありけれ
ハ今も其鶯囀と同事也故院を花にたとへてむかしを
しのひまゐらせねハそれとかくハかはりけるとやと
日の春鶯囀ハ不替ともむかしの花とハ桐壺なれハ
御とかく

院乃御かへし
九重を霞へたつる住家にも春と告くる鶯の色
私孟 朱雀院御哥也九重を霞へたつるとハ桐壺院治世
過てつきぬれとも今日の春鶯囀ハ告くる歌女とも栖よ
宮とゝうハ朱雀院をさしてかはる事も花の宴の時
も思出てよめり 細 洞中をも聊うちえてる也と自の御
幸ありし春を好まく思也
そちはみなことしたりしとハ弄みてかて 孟 源氏詞也
御前のうたゝ法皇の事ありし事か 私 法皇へ家に御酌
よ事の由也
御前へ乃皈給ふ人たる御行よ泣くつゝまた告人かくしぬ
私孟 宮の御哥也昔花の宴の時の御筆行なとを思ひ
つるへ今又春鶯囀をもかくしぬとも故院の治代

みとりこねと当代をほめて讀る哥也　細 唐堯よりの
礼楽をはしめたる也御代を祝し哥也
あさやうにそうしたるしるよういてとにめてたし
祇 さと奏したるさま也　細 祝言あるによりて也
としを経て　祇 此の御盃をとりと云さま也
哥の道をもちひくはしはるはあまつゝ花のちりやおもひたる
祇栄 冷泉院此奇也当代ハ道よりとハおもひ入たると卑下
して治てりたる哥也道をはなれてはしはる八事つゝ
花乃ちまうおもひあるやうや也　細 此歎をも我代乃ほ
るまも道に及たるやうに卑下し哥也
此の哥ハむかし此あらさま也のれくゆへくるしくあらしま
きて　栄 此哥の一巻ものともの調也
これハ此わさくしるさまようちくなとまるれハあまうこふとも

あはれとや思らん文の心は哥とし給へる事やあらん
栄 朱雀院よりそのことはしらすちかく也ハ内に此とも和ま
御すゝめあるいはとハまたしく此人の哥ハよまぬと
也ましきうた枕としるすやうなるとハ格式ありて道注
あまり数多の人くあるれハ古ほくさま次ゆへに申侍る
御へし　細 かくの御說也　祇 此御代にもそちるといふうらく
おそりしたるよし也　余同
栄雅とくてまかりなれはおなし事とくさめたる芸
アその哥をも内乃御とく和哥さう此治ことはの詞まへに
奏りて　栄 葉人の栄不也地下の栄人あるとある殺なとを
とはとうまへたるうや
哥ハ俗のおほきおもく詞つり語たるハいさしたとまなす
これたる治てありひとものはくし語つる哥ときとんうと

すゞしくかくハさんと讀へし
わらハ殿上人ハあまたさふらふ妓 抄 楽にそうする事也
ものゝてとも也 唱哥(ニヤウガ)
あれまさりゆくをひいてつきに桜人ハ催馬楽にさせし也とも
おもしろき催馬楽の殿上人のうたふこのうたとも也とも
まして 抄 阿那尊(アナタウト) 催馬楽呂 桜人 同 あまのはらの也
のたまひとさやうのことハもてなしやうにもてあそふのたまひ
さやうの事ハもてなしやうあるをとさやうに 桜人を
の舟とゝめ志ま田をとゝまちはくまる乃かな
これやそよやあとそやうなるこんやそよやとゝ
催馬楽にあそひハ殿にある所にぬれとる風情にて有
抄 大御遊也 賞して云也
内大臣の宮わたりにまうでとふらひてはまうけ給ふ

猶さんとあさましき事にかれたるにさいなまるゝ世猶あきと
まひるまれ此はいひ給ふさきてれ猶ハよろしくいひ給てはな
いかんおもひていひしさきいひひとりうちのはるまて猶まひ
と 抄 此戚乃源氏は(?)後そく悪后ハ戚夫人を見る也
呂后殿 抄 一本ニ此詞あり 柏梁殿也 未央(?)朱雀院(?)大
后乃は庭と見えたり 悪后也 花 柏梁殿ハ漢武帝
の柏梁殿ようにまうさるゝやうに天暦十年正月朱雀院
行幸謁者(エツスル)后千柏梁殿ニ此身ハ李部王記ニと
故宮をと云ひいて此事云 抄 此母后の后と大后此
齢(ヨハヒ)と見え給ふまで世をつきせくなく如給と古悟思
召との心也
かくおもしておもひしまふらひとも物おもひまはりは猶とと
ふかくおもほしまゐらすとも 細 云正此はんや々給ふ年ある

てもあやしく人はそこなひ有ましき物をとおもひしに藤壺
の院をまもりとおもひしと祈也
とハ此君のねかひにまかせたる院の御ゆいこんの春宮
をうしろみ給へき事をおほしめしけるに朱雀院
にもうし此給ふのこと云ひ出して遣給ふをうちのき給
私 徒に入給ふ大后の詞也さやうの事ハ遣給とハ奏す
弘徽殿大后との心也
さりとてさはうきとおほふをとくれ給てのちくる代をちめと云
此君へわか事とはなちのあらすやうにさため給ふ 私 大后への給
御はらの御詞也 桐壺院の母中宮の御よりとの給也
其の世ちゆるもと云ふに入わか事と侍るにもくれ
給て後ハ其を春宮も御覧しめさぬと也ないかさん
くさため給ふ御よ薩埵へ行幸してのつかす

さめ給と大后への事へ志をつへよの給ふへし 細 桐壺
摂政大臣なとも也
又くもと此し給 異 くるる宮おもくんとの御心の詞也
物とくしも御ミへきさ後よ世のさてもと思ひにさるひかん
と此し給のやうのとくしてへしせ給ふみつてさうゆを后ハ家
をまもちさきん給く 私 源氏をも可然やうにの給とも也こ
とさらみとハ家ある事り給ふんとの御詞也 細 帰と也
はつてや必ときとあるへきされよしも
やくにおほしたるんせとうきもち給ふへきさ法もくせハきこ
遣政物み云ひつかしへとおもひおほしを 私 源氏の左遷ハ我
ゆへとこそ云ひ給んとも也
内給のみむ乃えとのとやうにおほしたるにあられなる
おほえを 私 大后へ源氏ハなとの給ふとも給らく古のことや

さひ出給ふものとやかくれにとハ志河くにゐ給ひさせ給ふや
いかにも情ある人にさ聞ゆるをのぼるゝみちも同じめでたく思ひし給ひけり
ましく情ある人にし后ハ聞給やまひにそうせさせ給ふことおほさえ
ときさそ　是よりも皆若菜の巻也
法皇にうけ給る事此はかなさうき給ふおほくかくれのことに見え給ひけり
御心ようちあらぬと見えていのちあらくこゝろうき世のまゝ思ひとみ
給ふとく　源氏　大后の法の人奏し給ひけるのことも法皇か
えうとゆらん法給ふ此はかなき位と見るにもあるふくれとし
あらすやう御奏し給ふあれとも法皇に奏すかたはらに
なることとおほさるゝとのことなり
とうとくいさ御はしらにあらハすとおほしもいのりある　源氏　若菜
のみに叶朱雀院の法綏よろしきれとのことなり出つる御
とハ大后乃法機嫌（キケン）よしきことなり

気もてなしにかく給へりさくれなれともいさゝかゝりて
細　気ひかうたる也　河　識（ミコトニ）（シヌ）荒玄風情（テ）お見（キヨウ）（テツ）武（シ）年（カ）云二三一句詩
院ともいふ人のうちに見えしくゝそへひ出給ふる給ふある
孫　源氏　朱雀院も母后のいまよく気もておもひたまふかに給ふ
ゝ給ひとまてあつかひ給ふとのこと也　花　武羽松風其にもおり
人の機嫌（キケン）をとかくるましきにかゝるや
大宰の大弐の此日ハ御かへりうけ給て気もきたよおり
給ぬくしはめまゐらしこえまのともとゑらしき給ひかとも
きうゑハの人にいかにさ人あまんみゑける
宋　夕霧此るゝ也文に心くしうもハ詩を厳（ケンテウ）にしたゝ給ふとも
気もにたまり給擬文章にかきしまゐらするを気もとも
及第ともいかり及第の人のうちの人ハ文章生になるへし
弁　気もよ級給ぬとハ一節　秀才なるかハ此道も気生

とぞ也必りも世の中よりものかくれどもいひ出給ふ也

細 擬へしたる字生なれハ文章生と云り本居の作く儒者

乃家ならぬ人ハ秀才と云人ニも云也三人とは文章生中也

弄 行幸ハ日のるなり也　一説　擬文章生ニ成あるなりとそ

花 作文ハ詩也といふくしうとハほめたる詞也

物のはかなき事しはらうかなしえて御涙ニ物給ふ

弄 案 河海ニ古乃例ともあり君へ宮ニ略之

かの人乃浮ることよしよる事よりあきれと　案　雲井乃うちも夕霧

一 うき世給へなとも也　細同

御とくせちはなちて世の中に給ふもはしらされハ　弄　内大臣の息

井乃あれをとも擁し給ふとぞ也

とさまかくさまるをとも宮もいかなし給ハ後仕せすうらこそもう

内々めへきたよりも世の中に給てかうえ心にうるし其給ふなりけり也

弄 御とく此ゆるさ給ハとてうちとけなくなるともおもひ給へ

しとの夕霧此ハ嘆へし

大殿ニハかなる給ふにてもうちなるを知るなし宣ハひろく見知お

はそて　弄　案　源氏太政大臣ニ成給ふく給ふみの成くしかりね

ハ出給ふまとも中道く此のかたくおわれて給ふかくしされ

静かなる給ひを定てなんとも六条院なる事へし

ちうしこのみくお所々にちなる山里人なるをとも住たん人も海

せんの給んまて六条京極乃まちなされ　案　まてく此哉元や

うみく思人生の御給をとてこれはなる人をも海せんとも也

山里人を略給ふとも也

中宮の御子此式部乃住所をとふまちをもさめてはなくなせ

弄 案 六条宮の御旧跡故へし前息所不忘不審　花　中宮乃

かう此六条ハ六条御息所の御旧跡なるも此也其六条を六条院

四面八町乃中にはく里のへんれあるなり 弄六条宮乃跡
たかき人さすか 細 法皇亦此旧跡也 私 故前坊の旧跡也
式部卿宮あまん年そのかみより行ひおほしけるを 私孟 紫上
此文宮也法華経をも書たまふの御修法おほくなんとも
法華経のことは心ひとつ御願しまうけたまへるに 弄 法華経八巻
御読経無量義経普賢経乃事也
おほくとも書くしかれたることともおほしのこすまし
孟 源氏も紫乃上の御ことにハうちそへて見るにそ御心もおこりかに
しきとのこと如くし 私 源氏ハさ後でも思ひとまりて紫上
の文宮かれも物ことしかく思ひとゝも
さやう此法いそ紀をもおほしくハめつらしくなん法家為ちく
というそ紀ふ 孟 法紫乃も同八条院にてとの法会也
年乃色うてハ 孟 源氏卅四紫の上十四にて也

私 ぬ氏をされと年ころまて法華経そまめにいひなさるも
ましてこれは法ゆへ紀乃るを法としまかる 私孟 法ハこの紀と
八条宮院の事也法としこれハ紫の上の事也年ころとい
ひろく文紫乃上と宮よりかやうにもまさるれともいへく
ありしは見所ある氏にあるやうにつかまつるをとそかくれ
ゑある如くし 花 紫の上も上手なるも氏羽あり
細 法華経也年満也三代実録元慶二年九月廿五日太上
天皇正歴願学写僧五十人於清和院大設斎会講
法花経限三日訖太皇太后今年始満五十之算因竟
葛紫修善約緣餘齢親王已下文武百官畢会
かく人ゆひ人乃尽めあまと法経をはしまてはとよろく行経
はなきおこうしの日也 孟 此道も法紫乃用意成へし
法侍をそく説て尊をもあんらくそいそくも行ふる

抄 此物ハ装束をきるうへとハ紫上也
東乃院にもうつしすゑ給ふともあり　里　花散里なれハ
色かへ乃用にハ此さうそくなとをもそへし給とや此
中より紀ゆへ物へし
此あつらひまして心とるやひかへにかゝるかしあなかんなしく
紫ある世中にもまゆまされる此つそくさるあるを式ア□の家
みをとさめして　抄　此中ちひとハ紫上とも花散里とも
高乃るせとてやひつとは風流にても□紫とや
年ころ世中にはあまりきこえんあれとこのまうちやとくあや
みくにあさきされく　抄　源氏ハ□としあへくそくて給はくる
あれとも式ア宮にて情あるうりしとも
さとれかまてそうしつあめえん人と思ふも此うちあるかくされを
しさるそのとお明るに清くしとそひやうさ給ふるみてそ

かありさめ也　抄　源式部卿宮と柳よりしあひ中なり
しゆつた紫上乃さうひみそ紀程よひのまてせさた
るうみとせしれ此んも　抄　紫上の此ゆかりなそへてもとと
をと紀紹ぬ源乃清みへをとさてを□かりかしぬるや
いとわらくとうくゑとをお明さるをかくあまくさうてつ
ひ給へる人へくお明る中にとうきそ紀たる此きひもとく達
て世前人みつとをみてしえりてとにえひ　抄　宗　左遷の時式
ア□ふ喜し紀へハひとそくくえハそれもてひまてした
あかめ給へるを迷惑し給宮のんと也
うつつ達給へる此をとくせをとそ紀か家まてハ白ひ□ね
あいはくよお明をして文ちくは世にあまるまてをうしいとあき給
ハ紀明とぬゐうひのもとおれのくへにさうれとまる
をひの給を・宗　源氏乃思への中に紫上乃そてとの御也

いつまてはんゆかりもとのゝおほしける 孫 式部卿宮のきたの方
是紫上の継母なる故に紫乃御さいはひもそねみ給ふ
給ひぬるなるへし
女御の御まじらひの程なともおもふやうにもあらぬを
なるをもくちをしくおほしけるなるへし
孫 式部卿宮前腹乃御女御に来り給ふ后に立
給ふも源氏よくもあるまし給はぬとそ母北の方は
しかとおもひをさへ給へるにや思ひより給ふとそ 細 王女御之
后あるへきをさもあらすなりぬると云也
八月にそ六条院つくりはてゝわたり給ける 河 此六条院
は河原院を模せらる也 融公の家 一世源氏なれ
はなるも重ね給へる也 程略之
融おとゝの跡は中宮の御ふるさとなれはやかておはし

まよへし 栄 秋好中宮乃おほしめさんとも也
さらにみえしとのおほしまうけさまにちたまふなり
栄 紫上は春乃御方乃座也とも也
うへとしはうへのおはしましし御かたのさかいぬいのま
ちはしらぬ御ことおもしろくそこのさまを給へりまとおり
あるらけ山とも うへとしは 孫 花散里乃東院よりさう
けり給ふとも
りんすなるはすゝしく御すまひのむきさ山のかた
まつてとおしさめてさ深くまほしく此御おもひのかたへ
ところさまも給へり 栄つき山なとそんしてたかうなる花さ深也
南の東を山たかく春乃花の木かすをつくしてうゑ池乃
さま面白くすくれてみなへちの花てんさいなき家なう
ちか桜の中にやうやらかなうしろなとやうれしき乃にてあそ

りとよさとハうゐて秋のせんさいとこそむしろくほのうたま
せうるを中宮の御方ちかくもとの山にまちかへらるとこう
ありくさうしまたもとうへかつこれなるくきもまりしや
りとよとはまろへきさんとしとさそてらう人渡殿として猪乃雪
とこうるにはゝくをゐるそれにあひてたうけにさせん見るさ
まてらう　前の栽　栄　異也秋乃前栽とこそむしろくほのう
ほまのをたう出に紫上ハまちとこのゝ語ゆへにて拾へし
うまへゐるへし
さうのたけれとさまの雪山むらくにをとさへれたる此なり
孤　坤路婦中宮おうしまつ派也秋まんとよき語ゆへに
め氏のまへたるへしむとくそハ三派也さう哥まるとのと
くるれともおきをまるんも歌にあひていとハ八月
まうつり給ゆへなり

小説んうしハもくし帝たまうにつきおほせて夏のうをたつのきと
里まへちゝまき前栽られ行きて風とそしらるへくこたらぬ
まうを乃やうたる木ともうくおもしろく山里めきて
の花うさねまと淀へにまよるしありて根ゆうてたれ
なくちまるおもてしこさうひ　小説んうし　孤　良也若お
根ゆう花橘とハ前栽よ源氏花散里へ立寄給ひ色
葉也夏時橘乃香るとおそりしきを今思ふ語と
也夏と好語ゆへりめ氏のまへゐるよし
ふくたるとやられされ乃ふさくうて春秋の木草う
乃中にうちまおたりとんうしおもてハつよそて　孤　苦丹也
牡丹とも菖葉也ふさくとうへあとハ云ての雜
と出してうへ語とのんも　細　牡丹の歌
古歌　散ぬれハ後ハあくたになる花を思ひしらすもまとふて蝶かれ

むかしハおもくはなるをらちゆかく又月乃比あそひとて
ろうそくの目をかたにかけ出かへる事もしせて　たくさく飯
や競馬（ケイバ）なとの慈悲をうまへたるや　和たく此御也
むかひにえ女やしてよふなりしかさまをとくの人へとそてさ
せ給へり　此比屁や世にあり心止めや八上馬也名高也
細　云上乃馬也
面のまちハ小あすてれはきこしをせてこもくまつちあり
ゐてその御よう行かへく松乃さき志けく雪をともそてあ
うらんえとあるとにあをたかりをれうしめあさ霜もさそふへ
き菊れまう紀きれもうはあるそくそのかわさく名を
しらぬ山本ともの乃こふうきあるとどうくしうへとあると
面のまちハ　此所名と先にゐる也乾（イヌヰ）也こくてまちのとへ
文庫（コ）のト下あまくきてられさる也我へのいちあるそく

それ京これ我ハの目をいてるん此をすや絶さしてこも
あるれ木あそれとも給ふとるう紀をかくいへるうとや
細　系をうかるするそくそくくり　毎まえとあるとあり
むんのこころ紀ひとてる出給　源氏と思上云東遊へ給へり
行也付也乃比ハ吉日あるゆへまとてう給奴へし
ひとえとむみとたくさめさも給しうともさえうしきやうる
またとて中宮ハさくうしの人へさも給　各紫上と一家なり
給う行へとのんや但花散里もうの比家まもう給と
や中宮もうしの人へ給とや
迷ひのあいうくたえしきさまのぬ花ちるさしとそうれよりそ
ひとくうろひ給ふ　宋　花散里れさ由也おもとあくるしく
ろうくしうらぬことをいへり
真の法たうしひハこの比まおもうねといひと思ひとあり

孫 紫上の御かたは世をそむきひさしかれと此比の物語はあらぬとの心をいへり

御車十五両御前四位五位かちかく六位殿上人なとはさるへききはをえらせ給へり 孫宋 紫上のうつろひのさま也

細同 細 六位はちかくなすとも

ちらさぬ花桜とはあらしをさそふのみやも

宋 ことしくもいへる花桜とも

あるき給へれはきこえさせ給はおもとらるくしうらあそましきを

とはるし 宋 葡萄(ハクウ) 葡萄也

とくさの御こともおもしくおもし給ひて 孫 花散里

御ゆかりの夕霧をうしろみ給ひし御ゆかりとえ花色紫

よろしき給ふ給ひぬとも 前に花散里東北の殿

てうつろひ給とあり

侍従乃君そひてかうしつき給へるはまいれかう

かの人さまとあつかひて見んこたへたり女房はさらしま

ちなきとも 侍従乃君 宋 夕霧也姉乃御つきめしに侍

従は姫給とも

あそひわさをそおほくのことにまかせてたてまつるを

承 あかく 孫 あかきくもたかき所なる也 河宗

細承ここ 私 二條院とく承也こまかき也

又六条院へ給て中宮まゐりてさる給に御院へしきさせる

細 いりもむかひ

さまいへと雨もしけさいとみのおそくれ給へりあさ紙

宋 紫上の御うつろひと輾(テンタク)思ひてるやはいくとさすの中宮

みそかに思ひもてゆくへき一條との心をいへり 細同 孫 宋

うち給ゆへ也紫上に對(タイ)してあり

たゞ袖ふくは清有さ夜のふすまとてなさけゆかりにおもひしもとも
世ふかくもしられ給へるかもくまてあはれなるきしける
このまうちくれなゐの色々てふえへいともらうなるとなとう
色ゆきさうようしあやもちくおもしきはえひよ志あるし
給へる衣の月はなれは新参むらく文のつかさて
たゞ袖ふくは　栄　これは不及中と也
宮乃おまへこれもはれおもしろうきうちはへるゆへて
まれ清ふこれやうれ多くの花紅葉をとうえしまもそて
文のおまへ　孫　桃好中文れくる也
これさよなまし世給へり　紫上の清見へ中宮ようまへら
せらるゝ也
打渡さやうあるわしくれこきあそめ志をとんのとをまとあめう
さの上女はくもちもれゆもて袖のうさと　孫栄　志をとん乃織

袖ハ両をもうれ裏ハあをしはうくちう紫あをとたる
紅葉也　河　紫苑色両ハ蘇芳（スハウ）裏あをとき也
弄　うきとハうるはしきあそめハさぬよ必うきちる也一物
紫苑色とハさぬ乃うち色はうくちえハよの清よれ打紫
乃赤うくハよろしきたる也とと
ひとつくさうあれてらうわさとのくそうまさんしとよしうきて
条る　栄　童女乃よくまへんしたるさ夜也
うるうしきこさしなみあれと　孫　中宮ハふかめしさ清き夜
あはれたゞ桜のはしくなるとをハあめ女房（ホンミヤウ）売しそてハめしつう
ふまし多れともお桜ありしよてれにきさ給よるまそて
とも女房はうふ物へしる遣をわしくそのおうしきぶお
頭しまてゐとまうつる也
見ハ乃おうしきをあんえあ頭しきてたゞうある

花
紫花揖絲云古の后ハ是らハ時々を語に清かくれと
とれ世ハ清この月くさ庭くにつくりも絵にかくさそう
又もとをそてら人乃もう庭ハさ後ら上東門院の御方
也　細　花乃上東門院の御方をさしてかくるを
御方にま御ひかれれた道ハまてたつしわらさ庭御方のふえ
紙をこれよりおりし清せらうこふえ　紹　中宮よ清ふう
ひかれたる也中宮をほめて云る也へし　細　可秘よ
きんとのさうふし也不也
紅葉もまり河ぞのいわや紅葉を風乃ほてふかくに乃よ
紹　中宮の清方也紫上ハへんしま云を好給ハとハまる
九月時なれハ春を待まちんさひしきと秋を好
宮乃紅葉をと乃給て吉くさく給へとも御紫上へ
無念なるものや　細　へかしまるを心よまめ給ふとも
紅葉の面白きをも御覧せよと也
風にちる紅葉ハかろし春乃色を岩ねの松にかけてこそみめ
紹　紫上返哥也此紅葉風にちる紅葉ハかろく見ゆれハ岩根
乃松のフヘン不変なるによりてかんとも此返哥面白
とも春とも秋ともなかく御ほめ此松にとよめるか勝
勝と云り　細　紅葉ハ花よりかろき也岩根乃松の春
の様をそこそまされとよめる也秋くまハ松よの給へ
ともちかきとも卑下せはして返し給也
此いつもの松をさ庭くにされハ之みのぬほとるとるをとも
見かくとり給へほと云ひなる也給へるゆへくしさなるをなく
ら御んさて　紹　以河のまうにやうにさ庭うゆるなるハ土けて給
ろ也中宮のほめて清給さるも此清返るの城のうち
てとあるをおりしるとも以河のまほさ也

はせんなる人々もめでたかりし　細　中宮乃御事也
おとゝこれ女房乃はせうなるそ給ふをこなり　宋　此紫上の御方
に中宮の女房乃御前にて此御はちと給ふまゝしき事
と源氏の給ふ也
春乃花乃ころにこの御まへハ中宮へこれらの女房をとい
ひとしきさんにてひめ給ふおもえん人のもあるを　細　花鳥
蝶鳥をかきたる扇などいひ出たる也
さしあそびてそれのうきにたちかくれてこそ
弄宋　紫上中宮によりとうきて此比女房ハ左まを給へる
源氏の秋好御殿也中宮も紫上四季によきとへなり
はるのにとどまりてこゝろと中宮給ふもいとやわらかにつきを
ぬ御所なるさ夜のこゝろおほかなれ　宋　紫上ハまへと申給
へる花の御かたにそれをとゝのふとなく御くるしなる

つゆのこんとも
いとくまなやうなる御まへそまはまことしかりし給ふ
細　御まへしまて四町八町乃うちまことくいとひろく給へ
此こと後見まるる也
大井乃御かたをさうかくれ御方のひとひとまうりて
細　明石上也
数ならぬ人をいとなつかしきハさんと御用して神無月
おもんはかりも給ふか御まへつしひとのありさ後おとゝ
まつしてかくしまゐ給ふ
こゝも毎事に此奇特なるもきとも名を此御まゝなる
弄宋　明石上のそしも果ト下して以
なに神無月にまゐり給ふをそれをまゝさまあるそや
姫君の御名をも御ほせたる物をのさほうも皆うちあて
まかりしにいとまのくし見まてなさせ給へり　弄宋　此御

引居ふとおもひしめをはなちてそのかほをとるくしくはあつ
うち絡りしと此清らひろひをも清くさらくにおとるを
ちめもあくかくし見もてあし給とや